



人類が宇宙開発を行い始めてから長い時間が経過していた。  
宇宙開発を国家単位ではまかないきれなくなり、  
当時の先進国が出資して作った連邦宇宙公社が  
今では宇宙だけでなく、宇宙からの情報を統制し、さらには武器までも統制し、  
この世の神を気取っている。  
だがしかし彼らを構成する人々はまだ国家意識という人間が本来持つ本能に抗えずにいた。

祖国よ、失った誇りを取り戻せ！

必ず戻るとは約束していなかったよな。

南米ペルー リマ郊外一

四十キログラムの装備を担いでクラークンは必死に走っていた。

「山へ逃げろ！」

誰の声だろう、もうそれすらわからないくらいに現場は混乱していた。

ついさっきまで戦況は有利に働いていた、敵軍の奮闘虚しく圧倒的な物量でリマを制圧したはず  
なのだ、

それがたった一機の存在で覆されようとしているのだ。

「メディック！ メディック！」

倒れこんだ仲間を助けようと近付いた衛生兵すらもヤツの自動射撃の的でしかない。

「反撃をする、援護しろ。」

ボブが対戦車砲を構え、狙いをつけていたのでその場にしゃがみ込む。見事な軌道を描き砲弾  
はヤツに着弾するのだが傷一つ与えられていない。

味方のヘリも、攻撃機すらもヤツに傷一つ与えられないのだ。

ユーラシア大陸を席卷するノイマン帝国が誇るエアータンクSu-127b、南米蜂起の知らせを聞いて  
駆けつけたとんでもない援軍である。

「ノイマンの戦車は化け物か？！」

ヤツの射程距離に入った者はそれが人間だろうがヘリだろうが戦闘機だろうが関係なく高性能セ  
ンサーにより捕捉され、そして次の瞬間には生命を失っているのだ。

今まさにクラークン本人もその失われる生命の一つとなろうとしている。

被弾しその場に倒れ込むと体が重くて立ち上がれない、もがき苦しみながらだれもがそうする  
ように衛生兵を呼ぶ。

「メディック！ メディック！」

やがて駆けつけた衛生兵はため息と共に首を横に振り、モルヒネを注射する。

意識が朦朧となり、体がどんどん軽くなっていく。

そう—このまま

天国へと—

飛んで行きそうなくらいに—

月面都市フロンティア—

百万を越えるとされる宇宙人口の中心都市、全ての宇宙事業の中心でもある。

クラーケン中尉はまだ夜が明ける前に目が覚めた。

夜と言ってもかりそめの夜、そして朝と言ってもかりそめの朝だ。

起き上がると妙に軽い体、

そして狭く無機質なホテルの内装を見てここが地球ではないことを思い出した。

「時差ボケよりもきついとは聞いていたが、悪夢もセットとは恐れ入る。

だが、天国がこんなところならまだ行きたくはないな。」

クラーケン中尉は無駄に付いている筋肉と、

その筋肉の上にさらに無駄に付いている傷跡をまるで見せびらかすかのようにシャワーを浴びる

。

「こんな頼りない重力でもシャワーが浴びれるということだけは天国だな。」

そう呟きながらアンダーシャツに袖を通し、携帯端末の暗号録音メッセージを再生させた。

『中尉、公社のアイバーンと申します。ようこそフロンティアへ。遥々お越しいただき感謝いたします。』

『お迎えは明朝より向かわせる予定となっております。また、この度の新兵器の受領につきましては、祖国アメリカ合衆国の権威を取り戻すにおいて申し分ない……』

耳につく、やや高音の調子のいい口調に少し苛立ち、そこで再生を止めた。

クラーケンを乗せた車は居住エリアを抜け、空港エリアにある連邦宇宙公社所有の施設へとゲートをくぐり、さらには地下に降りるエレベーターへと乗った。

本来であれば入るだけでも三十分はかかるであろうここは、明らかに連邦公社の極秘施設なのだろう。

地下へとたどり着き車を降りるとそこには妙に恰幅のいい中年男性が、作り笑顔で出迎えてきた

。

「ようこそ、クラーケン中尉。技術開発部課長のアイバーンです。

昨日のメッセージは聞いていただけでしょうか、弊社の最高技術の結集であります地上用人型兵器、この価値を最大限に生かしていただけるのは我が祖国でもありますアメリカ合衆国しかないと思っております、中尉には是非ともその辺りを汲み取っていただいて本国にアイバーンありとお伝えいただければ幸いです。」

クラーケンが返事をする間もなくアイバーンのおしゃべりは止まらない。

適当に相槌を打ちながら、整理されたハンガーの向こうに視線を移すと、そこには確かに今回受領する、新兵器一巨人がそこにあった。

(これは・・・)

民間シャトルUC334便は月のフロンティアと地球のマスドライバーのうちケネディー宇宙センターを結んでいる。

この日の乗客は定員二百名のところ百八十六名、この後宇宙ステーションフォチューンで軌道変更作業と同時に荷物の積み替えや積み下ろし、そしてそこで降りる公社社員・乗って地球へ帰る人などの乗り換えを行い、停泊二時間後、最終人数百七十八名で地球へと向かうことになっていた。

ケネディー宇宙センターにあるマスドライバーで飛び上がったシャトルはこのフォチューンで月軌道へ変更され、帰りは月のマスドライバーから飛び上がってやはりこのフォチューンで軌道変更されケネディー宇宙センター脇にある滑走路へと着陸するのだ。

乗客のほとんどは久しぶりに降りる故郷へ胸ときめかせていたのだが、その中にいるアジア人の親子だけはどうも事情が違うようだった。

(今度のプラクティス、絶対上手く行くはずだったのに、なんだって今なんだよ……)

コバルトブルーのツナギ姿に身を包むアジア人の一見冴えない感じの少年、鈴木士郎は俯きながら通路の向かいに座る父、一郎を睨みつけていた。

タブレット型端末で読書に忙しそうだった一郎だが、そんな視線を感じてか、士郎と目を一瞬合わせたが、すぐに読書に戻った。

士郎は不満そうに視線を落とすと、隣の席から肩をポンッと叩かれた。

「なんだよ！天才少年士郎君、久しぶりの地球だというのにその暗い顔は。」

同じつなぎを来た精悍な顔立ちの白人の少年、テリー・カーターは士郎とは対照的に明るい表情を見せる。

「だって……」

士郎は力なく応える。

宇宙技術者を養成する公社専門学校へ飛び級で進学し、名の知れた士郎ではあったが、その天才ぶりに嫉妬されてか、はたまた宇宙では数少ないアジア人ということもあってかそれほど交友関係が豊かな方ではない。

「だってじゃないよ。君の母上様をお見舞いに行くのだから？」

愛する息子がそんな暗い顔していたのであれば余計に母上様に気を使わせるじゃないか。

ほら、やさしいお兄様であるテリー様が直々に見てあげるから笑顔の練習をしなさい。」

テリーは無理矢理士郎のほっぺをつまんで上にあげてみる。

「よせよテリー、変な顔になるじゃないか。」

たまたま同じ便で地球へと帰省するテリー。

だれとでも別け隔てなく接する彼の性格のおかげで、かろうじて友人と呼べるだけの交流ができていたのだ。

父一郎は日本の文部科学省出身で宇宙開発事業の技術者である。

宇宙ステーションなどの実験棟で重力制御装置の開発に携わっていた。

そんな父とお世辞にも上手くいっていない士郎は、隣の席がテリーで内心ホッとしていた。

「士郎君、君は本当に頭がいいのになんでこう子供なんだね。常に周囲に気を張って足らぬ所を補う。それこそが君たち日本人の美德ではないのかね？」

「子供って当たり前だろ？まだおれ十五なんだから。四つ上のテリーみたいなおっさんと一緒にするなよな。」

「またそうやってかわいくないこと言う。お兄様がもうちょっといじめて差し上げよう。」

テリーはニヤけた顔をして今度は士郎の脇をくすぐり始める。

「ご、ごめんなさい。テリー様、テリーお兄様。」

「許さないぞ、ほらほら。」

「もう許してください。」

士郎の表情は軽い苦痛に顔を歪めてはいるが、さっきのそれと比べて穏やかなものに戻っていた。

テリーとじゃれあっているだけが、その理由ではない。

彼の視線は、十五メートル先の向かいの美少女に向けられていた。

(あの人・・・)

「なんで宇宙公演なんて受けたのよ、昨晚のライブ最低だったわ。」

友人とじゃれあう少年が視線を向けた先—

ブロンドの美少女は足を組みながらそう言うと、不満そうに手に持った真空パックのジュースのストローに口をやる。

「子供の頃から一回は月に言ってみたって言ってたじゃない、王子様が居なかったから失望しちゃったのかしら？」

「そんな子供の頃の話よ、私はもう十七よ。いつまでも子供扱いしないで。」

その金色の豊かな髪を無重力にばら撒かれないようにしっかりとゴムで縛っている。

「焦らないでナタリー、貴方の王子様は歌ってさえいればきっといつか出会えるわ。」

壮年の黒髪の女性は、ナタリーと呼ぶ美少女に、なだめるように言った。

「だからいつまでも子供扱いしないでって言ってるでしょ！」

「大体毎日毎日前線だとか孤児院だとかドサ回りばかりして、軍人なんて最低よ！

ノリはいいけどヤラせるばかりで、あんな中に王子様なんて居るわけじゃない。

クリスティーナはもうすっかりトップの貫禄バリバリじゃない！」

ナタリーはアガサをわざとらしく睨みつけるが、

困った顔をしながらもアガサはナタリーと目を合わせることを止めなかったので、それ以上睨みつけるのをやめた。

それと同時にシャトル内に僅かな振動が伝わる。

シャトルは宇宙ステーション・フォチューンへと到着したようだ。

ナタリーはアガサにジュースを渡すと、その細い体をくねらせて客席の真中を通る通路へと飛び

出す。

「どこにいくの、ナタリー。」

「これ不味いから別の買ってくる。出発までにはちゃんと戻るわ。」

明るく答えながらも、ナタリーの心の中は穏やかではなかった。

(アガサっていつまでも私を子供扱い。もう私は守られなくたって十分自分のことくらい守れるんだから。)

そんな不満を廊下の床に込めながら蹴って、客室の出口へと向かう。

一方、士郎とじゃれ合っているつもりだったテリーは、ぼーっとした士郎の視線を無意識に追った。

可憐に通路を通り過ぎる金色の髪の毛を見て全身が色めき立った。

「おい士郎少年、アレはまさか昨晚一緒にライブを見に行ったナタリー・ヤンソンちゃんではなかったか？」

「うん・・・そうだね」

テリーはここ数週間ナタリーにお熱だった。

無論、士郎自身もこっそりナタリーの写真集を先日ダウンロードしたばかりなので人のことは言えない。

ハッキングが趣味の彼にしては珍しく、電子決済で買っていたのである。

それにしてもまさか、同じシャトルに乗っているとは一

そんな事を考えている士郎をよそに、テリーは窓側の席から士郎を飛び越え、シャトルの通路に出た。

「ねえテリー、まさか追いかけるの？」

「当然だろう少年、美女を口説くことを怠るのは英国紳士の名が廃る。では参るぞ。」

いつになく、イケメンスマイルを見せたテリーは、士郎の手を引いて通路へと飛び出した。

読書に夢中だった一郎が、二人の背中へぶっきらぼうに声をかける。

「おい、君たち。ちゃんと発車時刻前には戻ってくるんだぞ。」

「分かっております、お父様。ちょっとご子息お借りいたします。」

テリーはそう言って、指二本を額に向けてポーズを取る

本を読む父親の横顔を士郎のメガネ型端末が自動録画していた。

密林の中、昼も夜もわからない深い森の中でも敵はこちらの動きを把握しているかのように的確に待ち伏せている。

「敵襲！どこだ？どこだ？」

混乱の中、敵の正確な射撃に次々と倒れる仲間。

「小隊長、下がってください。」

「バカ言うな、おれについて来い。」

一歩前に出た瞬間足元に出ていた木の根に引っかかりその場で転んでしまった。

次の瞬間、一斉に射撃を食らい、後に続いていた部下が上に覆いかぶさるように倒れこんできた。

周囲を見渡せばただ味方の助けを求める声、というよりうめき声しかない。

クラークンはどうすることもできずにその場で部下の死体を隠れ蓑にしてじっと敵が去るまで待つしかなかったのだ。

一忌まわしい記憶が蘇る

遡ること一年前、南米戦線のジャングルにて戦うことすでに二年という

極限の状態にクラークンはあった。

ユーラシア大陸を席卷するノイマン帝国に同調するように南米の国々が戦列に加わり、アメリカ合衆国とメキシコ、そしてカナダが多国籍軍を組織し、一気にその鎮圧に向かったのだが、思った以上に敵の戦意は高く、思わぬ苦戦を強いられていた。

特に軽くて丈夫なルナティック合金をふんだんに使い更に、頑丈なフローティングコックピットを採用したエアータンクと呼ばれる戦車は機動力に溢れ、対戦車ヘリも対戦車攻撃機も歯が立たず、またフローティングコックピットの頑丈さが操縦者を死なすこともないため操縦技術が蓄積していくので戦うごとに戦果を上げていき、平野部では連戦連敗を喫していた。

さらにジャングルの歩兵戦では常に衛星からの情報がある敵側の方が有利であり、未知の場所から晒される奇襲に悩まされてもいた。

その地獄のような最前線からクラークンを救ったのは指導力を発揮した大統領でも友軍の力強い援軍でもなく、相手の内輪揉めに端を発した分裂劇であった。

物量が全てという基本戦略を崩さない軍上層部は、制空権・制海権を握ってさえいれればいずれ補給困難になって自滅するだろうと高をくくっていた。

確かに結果はそうだったが、その状況に至るまで最前線での戦闘には一切勝てず、相手の燃料と弾切れでなんとかゲームオーバーに持ち込んだというだけの結果である。

前線で戦った全ての兵士の怒りが最高潮を迎えたところで勝手に終戦となったのだ。

「このままではいけない、強いアメリカ合衆国よもう一度。」

クラークンだけでなく、当時前線にいた兵士たち全ての合言葉となったのだ。

クラークンの想いは、今にも沸騰しそうであった。

十メートルはゆうに越すであろうであろう、巨人＝人型の新兵器は確かに今までのモノとは一

線を描いているようだ。

相変わらずおしゃべりを続けるアイバーンの声などもう聞こえない。

クラークンはアイバーンについて行き、その詳細が見える場所まで移動する。

「型式ナンバーはまだ開発コードのままUUPC-XX、通称オートマトン。

どうです？中尉。堅牢性の高い最新式のフローティングコックピット、その周囲には惜しげもなくルナティック合金を配置してちょっとやそっとの銃弾や砲弾では貫通することは愚か、傷ひとつつけることもできません。フローティングコックピットですから衝撃緩和性能は当然のこと、耐熱性も耐水性もパッチリです。旧式と違って操作性も抜群に向上しておりますし、操作も基本動作など事前にプログラミング済みですから動かす程度であれば初心者からでも数ヶ月の訓練で容易に動かせます。コイツが本国の星条旗をつけてあの遊牧民達を駆逐する姿を想像しただけで、もうたまらんですね。」

フローティングコックピット ルナティック合金

自分達を苦しめたあの技術がそのままいや、それ以上のものが目の前にある。

クラークンの心は沸騰していく

使いようによっては、戦局を一気に変えることもできるかも知れないこれほどの兵器を無事地球まで送り届けるのが私の任務—

しかし今のアメリカ合衆国軍上層部にそれほどの覚悟と指導力はあるのだろうか？

沸騰する想いに不安という冷水が混じり、今になってとんでもない作戦を受けてしまったことをクラークンは初めて実感した。

そんな思いをよそにアイバーンはクラークンにタブレット端末を差し出す

「予備パーツも含めて全部で五体分ございます、コレとわからぬようにコンテナに偽装格納し、本日便の民間シャトルにてフォチューンまでお届けいたします。後は煮るなり焼くなりしてくださいませ。

・・・どうかここに受領のサインを。」

合衆国はコイツに果たしていくら支払ったのだろう。

いや、これだけの買い物ならば一国ではするはずもない、きっと連合国の国々と分割して買っているに違いない。しかもこんな兵器をだれがどうやって乗りこなすのだろう。

そんな湧いてくる期待と疑問をかき消すようにクラークンは受領のサインをしてアイバーンに放り投げた。

「本国にはアイバーン課長は素晴らしい技術者だと報告しておこう。」

「ありがとうございます、中尉。」

アイバーンの顔に不気味な笑顔が浮かぶ。

「ここまでやったんですから、技術開発部長くらいでは満足しませんよ。」

クラークンはアイバーンの笑みに応える事もなく、返事をする。

「コンテナへの収容、急がせてくれ」

(エイミー・・・)

南米戦線を生き延びたクラークンは、実家のあるマイアミへと戻っては見たが体は既に普通の生活に馴染めなくなってしまうていた。

テレビゲームやドラマから流れてくる爆発音に怯え、夜走り回るサイレンの音やヘリコプターの音にすら反応し目が覚めてしまう体質になってしまっていたのだ。

二十五歳になっており、家族の勧めもあって恋人を作ってはみた。

元々クラークンは明るい性格をしていて歌も踊りも得意だったし、エイミーは地味で質素ではあるがどこか優しい感じのする女性で彼女の歌声はどこか自分の心の隙間を埋めてくれるような、そんな感じがしたのだ。

「エイミー、おれはいつまでもずっと君のことを守るから。付き合ってくれないか？」

「守ってなんてくれなくていいから、ずっと一緒に居てくれるとうれしいわ。」

エイミーの笑顔はクラークンにとって最高の薬であったが、同時にエイミーを失ったら生きていけないという底知れぬ不安もこみ上げていた。

週に三度のカウンセリングの効果もなく、そして不安だけが増大していったクラークンは自滅してしまっただのだ。

(エイミーを守るにはこの国をかつての超帝国に戻さねばならないのに、大統領も軍上層部も何もわかっちゃいない。)

クラークンの精神がぎりぎりのところまで追い込まれていたところに、今回の任務の話が舞い込んできた。

最新兵器の取得に成功した、極秘裏に月から本国までその兵器の輸送を任されたのだ。

チームは十二名、当然全てアメリカ合衆国軍人であるため宇宙生活の経験はない素人集団ではあるが、一人を除いて南米戦線を経験しているだけあって戦いには慣れているのがせめてもの救いだ。

現在、オートマトンの受領に成功。

フロンティアの民間シャトルに紛れ、無事フォチューンまで到着。

都合五体分の機体と共に民間シャトルで月を離れる、部下の半分は軌道変更用の宇宙ステーションフォチューンでチャーター便を用意しており、荷物を載せ替え次第すぐにでも地球へ飛べるよう、作業している様を、フォチューン第二休憩所から見下ろしていた。

「ここまでは異常なし、か」

ぼんやりと呟くクラークンに、通信端末から呼びかけるような声が響き渡る。

「公社から荷物引き取って、地球に届けるだけならば運送業者を使えばいいですよ。」

士官学校を卒業したてで黒髪短髪を七三分けしたダサさ、見たからに新米将校であるブルックス少尉が作業中の兵士達をよそにチャーターした便の中から無線を通じて話しかけていた。

「少尉、公社と言っても所詮は多国籍資本の集合体だから一枚岩ではないのだよ。

情報が瞬時に世界を駆け巡り、航空機で地球を一周するのに一日あればどこでもいける時代になって、さらに宇宙にまで人が進出したとしても、人は国や地域という最低生活単位から意識を広く持つことができなかつたのだ。

だから戦いもなくなるし、経営陣の許可なく重要機密兵器を母国に売り払う課長まで出てくるんだ。」

「そんなものでしょうか、私はもっと宇宙に人類の進化や未来を感じていたのですが。」  
そんなブルックス少尉の眺めていたモニターにキラリと光が見えたような気がした。

「小隊長。」

その短い一言でクラーク中尉は、事態を察知し今いるターミナルから月側の方向に目をやった。

「なるほど、警備艇でじっくりと付け回していたわけか。だとしたらここで来るな。」  
クラークは端末をしまおうとすぐに壁を蹴り、少しよろめきながら反転、第二休憩所からフードスペースを抜けターミナルまで向かうルートを取った。

移動しながら胸ポケットに閉まってあったエイミーの写真を取り出し、キスをする。

「必ず帰るとは約束してなかったよな。」

その言葉とは別にクラークの中で何か燃えたぎるモノがあった。そう求めていたのだ、戦場を。そして自分の死に場所を。

だからこそ不慣れで不透明な危険の伴うこの作戦に喜んで参加したのだ。

「ちょっとアガサに言い過ぎちゃったかしら。」

ナタリーは血の上った頭を冷やそうと、冷たいコーヒーの入った真空パックを購入し、カウンターに腰掛けていた。

乗客の乗り換えがあるわけでもなく、今乗ってきた便の荷物の搬出くらいしか人が外に出ていないのでターミナルは閑散としていた。

だからではないが、人気急上中の歌手は少し気が緩んでいたのかも知れない。その気の緩みに突然猛烈なファンが飛び込んで来た。

「ナタリーさんですよ、昨晚のライブ最高でした。僕はテリー・カーター、ちょっと憂鬱な夏休みを祖国で過ごそうと帰省途中に貴方のような美女と巡り逢えるなんて、まるで運命の出会いですよ。」

あ、ちなみにこいつは鈴木士郎、僕の学校の友人でただのオマケです。」

「どうも、オマケです。」

「ぶっ！ ぷははは・・・！」

このキザ男だけなら警戒するところだったが、あまりに突拍子もなく、間抜けな顔に変わったメガネを掛けたアジア人が『オマケです』なんて真面目な顔をして言うので、ナタリーは思わず大爆笑をしてしまった。

さり気なく二人お揃いのコバルトブルーのツナギに、胸の連邦宇宙公社専門学校の文字とロゴが入っているのを見つけ、その下にそれぞれの名前が入っているのを確認した。

「で、美男子さん達。美少女をナンパするのにまさか手ぶらじゃないでしょうね？」

表情ひとつ変えずにテリーが切り返す。

「ええ当然です、あちらの甘いケーキはいかがかなと思ひましてね。味はこの前実習に来た時に確認済みです、とても美味しいですよ。ただ残念なことにチューブ入りですけど。その見返りと言っては失礼なのですが、このツナギに是非サインをいただきたいのですが。」

ナタリーはここ最近ずっと最前線の慰問ライブに出かけていて、兵士たちにいつ襲われるかもわからない緊張感の中で生活をしていたので、同年代の男の子とこんな平和な会話をするのは久しぶりであった。

テリーはお店のマスターからケーキ入りチューブとマジックペンを受け取ってその二つをナタリーに手渡す。

その時テリーの手に触れた感覚がナタリーにはあまり心地良いモノではなかった。

ナタリーはペンを取り、ササッとテリーの胸の名前下に自分のサインを書き込むと次に士郎のツナギへと書こうとする。

それに驚いて体をビクッとさせる士郎の挙動にまた笑いがこみ上げてきた。

「大丈夫よ、あなたはケーキじゃないからって食べたりしないわ。」

ナタリーは込み上げてくる笑いをごまかすように、士郎の背中に手を回して抱きかかえるよう

にしながら丁寧にサインを書き込んだ。

ナタリーの胸が土郎の肘に当る。

その瞬間、土郎のメガネ型端末に一瞬にしてナタリー・ヤンソンの検索結果・音源・ミュージックビデオ・写真集、はたまたブラジャーの広告・書籍〔巨乳になる十五の方法〕などのショッピングデータが一気にメガネの内側に表示してしまう。便利な端末だが使う人間の感情の暴走によってたまに迷惑な時もある。

「あああり、あ、ありがとう、大切にするよ。」

土郎はナタリーのスリーサイズのデータ・挑発的なポーズをしたビキニ姿の写真数十枚を自分のストレージに残しながら、黄色い肌を真っ赤にしてナタリーを見つめていた。

赤くなりながら、じっと自分の目を見つめられながらも礼を言われると、

ナタリーもさっきまでのイライラが消えるようだった。

「こちらこそお礼を言わなきゃ。昨日のライブあまり盛り上がりなくて正直ちょっと落ち込んでいたのよ。」

でもこうやって楽しみに聞いてくれた人がいるってわかってよかったわ。」

無意識に笑顔でナタリーは話す。

「月にいる人間は皆、脳みそが科学でできている輩ばかりですから。貴方のステキな歌声すらただの波形に変換しかねませんからね。僕は貴方の歌が大好きで生で聞けると思うと居ても立ってもいられない状態だったんです。」

得意気にテリーは語り始める。

「でも居辛かったんじゃない？私のファン、女の子ばかりだから。」

「ええ、ですから土郎にも一緒に来てもらいましたよ。」

「へえ、土郎君も私の歌聞いてくれたの。」

とまで言って少し嬉しかったナタリーだったが、テリーの名前をもう一度思い出し、心が締め付けられた。

テリー・カーター。

そうこの言葉使い、身のこなし、なるほどあのカーター一家の子息なのだとナタリーは確信をした。

無意識に表情が強張り、俯く。

とんでもないところでとんでもない出会いをしたものだ、カーター家と言えばイギリスでは知らぬ人がいないくらいの富豪の家であり、同期でライバルであるクリスティーナが所属しているレコード会社もカーター一家所有のレコード会社であった。

さっきはアガサに文句をつけてみたものの、やはり現実的に上流階級と呼ばれる人とはソリが合わないことを痛感し、そこが自分とクリスティーナの違いでもあることを認識させられてしまったのだ。

アガサに謝ろうと思ったままナタリーは黙りこんでいた。

先程までの和やかな空気が、不穏なものに変わるのを土郎は何となく感じ、テリーに視線をやる。

。

「ただ、士郎には貴方の歌の良さはまだまだ分からないといいますか・・・」

空気を読めず、語り続けるテリー。

士郎が呆れていると、視線の向こう側に闘志むき出しの表情でターミナルへ駆け出している、屈強な男の姿を見つける。

闘志むき出しで走るクラーケン中尉の表情は、士郎にとっては見たことのない心底恐ろしく、印象深いものであると同時に、嫌な胸騒ぎを感じるのであった。

「あの～、二人とも聞いてますか？」

テリーがようやく我に返ったと同時に、俯いていたナタリーが、突然立ち上がる。

「ケーキありがとう美味しかったわ、もう戻らなきゃ・・・」

そう言いかけた瞬間、大きな物が崩れる音がした。

その音は彼らの人生を変えてしまう音でもあった。

民間シャトルからブツをチャーター便に入れ替えている途中のことだった。クラーク中尉はその目を疑った。

「やはりここできたか。民間人が居ようと関係ないのだな、遊牧民達は。」

掃除屋、正式名称はUUPC-06作業用ロボットを改良し治安維持用に特化した対人制圧用の人型兵器である。

大きさは五メートル程度ではあるがフローティングコックピットを採用しており、通常兵器を用いて反撃しても太刀打ちできる代物ではない。

さらにこのUUPC-06が掃除屋と呼ばれる所以が腰の位置にある高性能センサーと機銃だ、スイッチをオンにするだけで個体識別もなく、生体反応があるもの全てを自動掃射であつという間に殲滅してしまう脅威の殺人兵器なのだ。

通常はゴム弾などを装填しており、施設や人命の保護に務めるのだが今回は任務の内容からその装備は実弾かもしれない。

クラーク中尉の脳みそが沸騰していくのがわかる。

「たまらないね、死にたくないって思えば思うほど感じる生ってヤツの匂いがするよ。」

今までに積み込まれたブツは二体、残り一体と二体分のパーツがまだ積み込めていないのだ。ジャミングはない、無線を繋ぐ。

「ブルックス少尉、いつでも飛び出せる準備をしておけ。」

「了解ですが、まだ船長が着いてません。だれも船を飛ばせないのですが。」

確かに予定よりまだ一時間半早いので乗務員が揃っていないくて当たり前なのだ、そして警備部からしてみたらそこを見越しての襲撃だからこそ意味があるわけだ。

周囲を見回して冷静に判断をするために深呼吸をする。

とりあえず、積みこみ状況からしてターミナルに倒れてしまっているコンテナは諦めよう。

そして、シャトルのクルーが操縦席にいることを確認してクラークはターミナルを駆け抜けるとシャトルへと飛び乗った。

組立前の機体よりもすでに組み上げられた機体を優先したいのだ。

それを見て荷物搬出をしていた部下の五名が隠し持っていた武器を取り出して行動を同じくし、一気に定期便はハイジャックされた状態となった。

機内は一気にパニックに陥ったのだが、そんなことにお構いなしとばかりに部下二人があつという間に機長室を占拠する

「悪いが副機長はあっちの船を操縦してくれないか。地球に無事着いたらちゃんと解放する。」

銃をつきつけられた副機長に選択の余地はなかった、クラーク中尉の手信号で二名の兵士が護衛に着いてターミナルを横切ろうと飛び出した時、掃除屋の機銃が火を吹いた。

轟音と共に兵士二名と副機長はあつという間に蜂の巣にされてしまい、その場に浮かび上がった。

そしてターミナルで休憩していた十名余の人たちもその掃射に巻き込まれ

一瞬にして帰らぬ人となってしまった。

「ちっ、実弾かよ。やっこさん達本気だぜ。」

だがクラークンはなぜだか笑顔であった。

警備艇で指揮を取るドルゴスレン艇長はその巨体を所狭しと艇長椅子に押しとどめながら無線で出撃させた三機の掃除屋に指示を飛ばしていた。

「いいか、ブツを取り返せないなら破壊して構わない、目撃者は全員無事保護しろ。

フォチューンには最低限のダメージ以外は許さない、当然これは建前上のことだ。

事後全て略奪犯達のせいにするればいいから遠慮なく徹底的に破壊と虐殺を完遂せよ。

それとこれが一番肝心なことだから注意して聞けよ。

給料の範囲内で働け、地上ではともかく宇宙で死んでも祖国は褒めてくれないからな。」

指示を出し終わるとその巨体をくねらせながら顎髭を撫でながらため息をつく。

「それにしても、ここでこんなことやっちゃうと始末書書かなきゃいけないじゃないか。

まったく。始末書なんて給料の範囲外の業務だからやりたくはないんだけどね。」

フードスペースに居た三人と店のマスターはカウンターを背にしゃがみこんでいた。

「なによこれ、一体何が起こってるの？」

状況確認しようとカウンターから頭を出そうとしていたナタリーの頭を士郎は押さえて下げさせた。

マスターはただ地面に這いつくばっていたが、テリーは冷静に周囲の状況を確認し分析していた。

「ターミナルにあるあのコンテナの中身、あれはなんだ？士郎、あれを知っているか？」

士郎はカウンターの脇からチラリと顔を出して見てみるが見たことのない巨人のようなものが見えた。

周囲の会話や士郎の思考から勝手に情報収集をするはずのメガネ型端末でもデータが出てこない。

「あんな機体みたことない、アレを勝手に持ちだそうとして警備部に見つかったのかな？」

「そんな単純な話じゃないな、警備部がその気なら月から持ち出す際に止めているはずだ。

ここで襲撃となると、月ではチェックなしで通過できたということだよな。」

テリーは血を流して宙に浮かんでいるハイジャック犯二人を凝視する。

「身のこなしは軍人、人種的に連合側に見える。警備部は基本的にノイマン出身者で構成されている部隊—地球の代理戦争って訳か。民間人はいい巻き添えじゃないか。」

とりあえずテリーは非常用スペースを探す、非常事態の時に備えて食料や水、簡易宇宙服やヘルメットが保管されていて、地下道などで脱出できる通路も整備されている場所のことである。

「非常用スペースを見つけた。ここから十メートルくらいの場所だからとりあえず駆け込んでヘルメットを着用しよう。カウンターのおかげで掃除屋のセンサーからは死角になっているはずだ。」

「さっきの男の人も・・・もしかして・・・」

士郎は何やら情報収集に夢中になっているようなので、テリーは左肩を二回叩いて移動を合図する。この合図は二人が実習の時に宇宙空間で無線が通じなかった時用に作った合図である。

飛び出して掃除屋が火を吹いたら終わりだったのだが、交渉中なのだろうか撃たれることなく無事にターミナルの端にある非常用スペースへと駆け込むとそこに置いてある機材をあさり始める。

ノーマルスーツを発見するとマスターとナタリーにそれを渡し、自分たちもヘルメットを装着する。

「これを着ろってこと？」

何もわかっていないナタリーに説明している時間もなかった。

士郎は改めてナタリーの格好を見る、無重力空間なのでさすがにスカートは履いていない。浮くのだから女性として当たり前の選択だ。

ノースリーブにホットパンツを着用、靴もヒールの高い靴ではないことを確認、髪の毛もちゃんと束ねられている。そしてまたメガネ型端末に出てくるナタリーのスリーサイズのデータも多少の役には立っているのかもしれない。

これならそのままいけるとばかりにそのピンク色したスーツのジッパーを下まで下ろして足を入れるように促す、そのまま両足が入ったら両手を入れるように促して髪の毛も丁寧にスーツの中に入れてジッパーを上げる、そしてヘルメットを被してロックをかける。

「いい、ナタリーさん。このスーツを着ていればここにいる限りは酸素の心配はしなくていいんだ。でも宇宙空間に放り出されちゃったら温度でやられるから気をつけて。」

テリーが注意深くターミナルの状況を観察していて、マスターが備え付けの端末を操作して緊急避難経路の確認をしていた。

「ここからの避難経路は無事らしいが、この状態ではステーション内に逃げこんでも後から虐殺が始まるだろうから無意味かもしれないぞ。」

「確かにそうですが、今このままでは対抗手段もなし。一時的にステーション内に逃げ込んで時間を稼ぐということも一つの選択肢ですが、あくまでも最後の手段ということで。」

「どうしてよ、あの人達だって公社の人間なんでしょ？何を持ちだされたかわからないけど、目撃者全員殺す必要なんてないじゃない。」

テリーがターミナルの状況を見ながらチラチラと振り返る、ナタリーのトンチンカンな分析などこの場では邪魔なのだが、しかしこうなってしまった以上説得し納得してもらって自分の指揮下に入って動いてもらわないと逆に危険なのだ。

「公社と言っても一枚岩ではないんですよ、特にああいう新兵器が持ちだされたとあっては地球上の軍事バランスが変わっちゃうこともありますからね。」

「これはまずいな、交渉というよりこれは最後通告みたいだ。シャトルごとここを火の海にする気だぞ。」

士郎がモニターした無線の内容を解説していたが、テリーは気が付いてしまった。

そう、今はただ恐怖で自分のことだけを考えるのに精一杯だがあのシャトルの中には士郎の父親

、一郎が乗ったままであるし、ナタリーだって一人で移動しているわけではないはずだから関係者が乗っているはずなのだ。

士郎は相変わらず情報収集に夢中であるし、ナタリーもまったくもって状況を把握していないのでまだいいが、そのうち彼らがパニックを起こしてしまって突拍子もない行動を取る前に、テリーは決断をしなければならない状況に追い込まれてしまったのだ。

「ナタリーさん安心してください、私が全力を持ってナタリーさんだけでも守りますから。」  
テリー得意のイケメンスマイルで決め台詞を言っているが、  
どうもナタリーには気持ち悪く感じられる。

「大丈夫、自分の身くらい自分で守れるわ。それよりこの状況をなんとかしないと。通信で月とかに救援要請できないのかしら？」

マスターが諦め半分で腰を下ろした。

「公社の警備部相手だから無理だな、ここのステーションの管理部連中も動き出したっぽいけど掃除屋相手では歯が立たない。」

ターミナルの外には管理部の守衛が集まっては来ているのだが、相手が警備部となると武装の差が明らかなのでなかなか中に踏み込もうという気配はない。

「どうすればいいんだ。このままここで終わっていいはずがないんだ。」

絶望感が場を覆い尽くした時、士郎がメガネ型端末から答えを得たようだ。

「テリー、あの倒れてる機体を見てて。ちょっと動かしてみるから。」

「どういうことだ？」

「あいつ電源がスリープになってるだけみたいだから、リモートで多少は動かせるんだよ、本当に多少だけだけどね。でもそれで掃除屋の気を引けるならなにかしらのチャンスになるんじゃない？」

士郎が首を動かそうと意識するとかすかではあるが倒れた機体の頭が左右に動いた。

「あいつをこっちまで飛ばせるか？」

「推進剤使えば飛ばすことも可能だな。外から通信で見える限り操作系も大きく変わってはいないね、基本的に実習で使ってるUUPC-04とそんなに変わらないし。乗り込めさえすれば動かせると思うよ。」

## 起動

---

機長室に立て籠もるクラーケン中尉は無線で相手に要求を突きつけていた。

「ドルゴスレンさんとやら、こっちには二百名からの人質がいることを忘れるな。」

「で、要求は？」

「今この現状のままでいい、我々と機長を我々の船に乗って出港するまでの間見逃してくれりゃいいんだ。」

「みすみす我々に見逃せと？」

クラーケンは苛ついていた、こうやって時間稼ぎをされているのではないかと不安になってきたのだ。

チラチラと掃除屋の動向を見ながらの交渉は続く。

「積荷はちょうど半分、ゼロよりはオタクらも上に顔が立つでしょう？」

それに優秀な科学者や外交官達の二百名の命をハイジャック犯から助けたとなれば英雄だ。

それ以上何を望むんだい？ そいつは欲張りってことになっちゃうよ。」

「ほう、面白い。勤め人の心をよくお分かりなんだね。」

「おっと気をつけろよ、この船には爆弾を仕掛けたからな。おれ達が飛び出したからといって掃除屋に撃たせたら、この船は爆破するからな。」

クラーケンは無線の向こうで鼻で笑う音が聞こえた気がした。こっちのブラフは通じてないか？ ターミナルを挟んで反対側にはブルックス少尉が心配そうにこっちを見つめている。

その少尉に向かって手信号で待機を指示しなおす。

大きな衝撃が船を揺らした。掃除屋の一機が銚を打ち込んだのだ。

このままこの船で飛び出すという選択肢もあった、しかし掃除屋の銚のせいで飛び出すタイミングを失ってしまったのだ。

「ちっ、おれとしたことが。判断が鈍ったか。」

選択肢は二つしか残されていない、このまま機長室に立てこもって殺されるか、飛び出して殺されるか。

刻一刻と変化する状況で待機は死に繋がる、常に動いて主導権を手にしろというのがクラーケンのモットーであった。

「行くぞ。」

機長を連れて部下二人と飛び出した。その瞬間、掃除屋の掃射が容赦無く兵士たちと機長を蜂の巣にしてしまう。

（ごめんよエイミー、お前のところには帰れそうにない。）

倒れこむクラーケン、しかしその顔はなぜだか笑顔であった。

『アメリカ合衆国万歳！』

「今だ、士郎！」

状況の変化に咄嗟にテリーは士郎に指示を出した。

士郎はメガネ型端末を思考で操作し、まだ見ぬ機体の推進剤を流出させた。

ターミナルはほぼ無重力状態であるのですんなりと機体は動いてきた。

「よしここで逆噴射をして止まれ。」

見事に制止してみるとなんとしゃがんだ状態のままに人型ロボットが登場したのだ。

回転をさせコックピットを自分たちの方に向けて立ち上がらせると

改めてその大きさにびっくりするのだった。

「こんな大きい、何に使う気だ？」

ブルックス少尉は困惑していた。

目の前で上官の死、そして急に動いた人型兵器、さらには脱出不能の状況の閉塞感。

だがしかしあの人型兵器の行った先に数人の人影が見えた。

「あれを動かせるということはこの船も動かせるのではないか？」

しかし相談する相手はおらず、ただ独り言を言っているだけに過ぎない。

瞬間で判断をしなければ間に合いそうにない。

ブルックスは決断をし、部下二名をあの人影に向かわせようとした瞬間、その人影の方から近寄って来ようとしている。

「敵か？味方か？味方だと思いたいところだが。」

部下に射撃を制止させ様子見をすることにした。

士郎がコックピットを開けて乗り込んだ瞬間、ナタリーも乗り込んで来てしまったのだ。

「ナタリーさん、なんで？」

「なんでってあのイケメン君が行けって言うから。」

通常はノーマルスーツのヘルメットにリンクさせてヘルメット上に情報を映し出すのだが、士郎の場合は自分自身のメガネ型端末にリンクさせる。

こうすることでオートマトンのセンサーが得た情報と自分自身の生体情報が密接にリンクするので飛躍的な情報収集能力の向上と、そして普通ではありえない動きを素早くオートマトンにさせることが可能になるのだ。

「定期便はすっかり掃除屋に囲まれて身動きできず。あのチャーター便まだ出発しないとなると、どうやら操縦できる人間がいなっぽいですね。今あの船に飛び込めばあるいは逃げ切れるかもしれない。マスター、行けますか？」

「ああ大丈夫だ、あの船くらいなら私でも動かせる。」

士郎はテリー達の会話をセンサーで傍受すると、ここにナタリーを送り込んできた意味を察知した。

「なるほど、テリーはイチかバチかの勝負をする気だからナタリーさんを安全なこの中に入れたわけか。ならばこちらも支援するか。」

メガネ型端末とのリンクが終わると一斉に操作系の分析が始まった。

とりあえず単座機なのでナタリーを自分の膝の上に座らせる。

「窮屈ですけど我慢してくださいね、ベルトで固定しますから動かないで。」

ベルトで固定しようとするナタリーの豊満で柔らかい肉体を想像しただけで

士郎の下半身がつつい反応してしまう。

現実には、分厚いノーマルスーツ同士の接触なのだが。

「もっと密着しないと、隙間があると衝撃が来た時に危ないんだ。」

「こうかしら？」

ナタリーはなんの疑いもなく士郎の言うことに従って自分の体を士郎に密着させ、ナタリーの体ごとベルトで自分たちを固定するのだ。

その際に触れてしまうナタリーの胸や、尻の感触（の妄想）がそのままダイレクトにメガネ型端末に映し出されるが、その映像を士郎の想像力が上回っており、下半身もそれにダイレクトリンクしていた。

「士郎君、さっきより座高が上がってる気がするんだけど。」

「え？あ、ごめん、不可抗力なんだ・・・我慢して。」

その間に操作系の分析は終わってしまった。

「なるほど、基本操作は同じだけど簡略化されてレバーとかじゃなくこのパッドで動かすようになっているわけか。」

とても初めてこの機体を動かすとは思えないくらいにスムーズに機体は動き始める。

なんだかよく分かっていないナタリーも、さすがに今日初めて見たであろう機体を簡単に操作できる士郎を見て驚きを隠せない。

それに何かを一生懸命やっている男の子の姿はちょっとだけセクシーであった。

「武器はないのか？」

いくつか候補はあるのだがどうやら今は持っていないらしい。

「これ不思議ね、コックピット内には何も映っていないのにヘルメットのバイザーに画面が出ているっていうの？」

「ああ、その映像もこのコックピット内のどこかに生体が接触することで飛んでくるんだ。」

「じゃあ今私は士郎君の下半身を通じてこの映像を見れているわけね、うふふ。」

「だからごめんってば。」

士郎の下半身は落ち着くどころかどんどん元気になっていた。

そんな会話をしている時に画面上にはシャトルに爆弾を仕掛けている掃除屋の姿が映し出された。

「あいつら。ナタリーさん、ちゃんと捕まってね。」

操縦パッドを動かし始めるとさすがに士郎は妄想を楽しむ余裕はなくなっていた。

手の置き場がないのか、士郎の手の上にナタリーも手を置いて、まるで二人で協力しながら操縦しているかのようにも見える。

推進剤を撒き散らかして士郎の機体は一気に掃除屋の中に突入した。

シャトルの反対側にあるチャーター便は明らかに警備艇と対立していて多分連合側側の秘密任務を帯びた部隊であろう、しかし銃口は明らかに近づくテリー達を狙っていた。

士郎がターミナル上で掃除屋相手に格闘を始めた隙を見て両手を上げてテリーとマスターはゆっくりと近づいていく。

「連合国の兵士だな？ご苦労。私はテリー・カーター、イギリス連邦のカーター伯爵家の三男でありイギリス海軍少佐のジミー・カーターの弟である。見たところ操船に困っているようだが手助けをしようか？」

これとばかりにテリーは自らの連邦宇宙公社専門学校のロゴをアピールするように指さしていた。

一人の若い士官が立ち上がって手を差し伸べてきた。

「こちらアメリカ合衆国陸軍所属のブルックス少尉だ、お父上やお兄様の活躍存じあげている。ここで会えて光栄だ。この船に歓迎しよう。」

ひとまずハッターが通用してテリーはほっとした。

「こちらのマスター、いやえっと。」

「私はダニエル・アーロン、同じく合衆国出身だ。輸送船なら操縦経験があるから任せてもらって構わない。積荷が暴れまくってくれてる間に出かける準備をしよう。軌道もへったくれもないがとりあえずここから逃げ出さないとクリスマスのターキーみたいにされちまう。」

黒髪の七三分けをしたブルックスが敬礼をしている間に部下の兵士達が出港準備へと作業を開始する。

掃除屋に乗り込んだバドルフは混乱していた。

人型兵器が突然動き出したと思ったら反転して今は目の前には自分たちに向かって突入してきているのだ。

「艇長、こんな仕事だって聞いてませんよ。これ掃除手当だけじゃなく危険手当出るんですよ？」

「馬鹿者、危険手当より命の心配をしろ。今すぐ退却しろ！」

しかしドルゴスレンの命令が届く前にバドルフの掃除屋は新型の右ストレートを受けとめ切れずにふっとばされていたのだった。

その衝撃によりバドルフは意識を失い戦闘不能になってしまった。

「まずは一つ。」

急激にオートマトンを動かしたので士郎の活発な下半身をナタリーの尻が刺激した。

「もうナタリーさん、ベルト閉める前にもっと密着しててくれないと。危険ですってば。」

「だって急に動くんだもの。さっきから何か浮いてるし。それより何があったの？」

ナタリーも突然の士郎の行動に驚いていたが自分のヘルメットに表示される外の映像などを見てやっと状況を理解したのだ。

「シャトルの後ろで動いてるヤツ、あれ何しているの？あれを止めに来たのね？」

「ええそうです、でも今ので右手が壊れちゃいそうですけど。」

今の右ストレートは確かに強烈に相手に物理的ダメージを与えて中のパイロットを揺さぶり戦闘不能にしたのだが、しかしその衝撃が自分たちの機体にも返ってきてしまい右腕の付け根にダメージを負ってしまったようだ、このまま何発も殴ったのでは右手が動かなくなってしまうようなのだ。

「敵はあと二機、それを倒すには。」

さっき吹き飛ばした掃除屋がもっていたコーキングガン拾う。

「使えるのか？」

残り二機のうち、一機は爆弾を仕掛けるための機体で装備はなし、もう一機は鋸を撃つ銃を持っていた。

「まずは武装している方の足を止める。」

「なんでよ、爆弾仕掛けてるヤツを早く止めないと。」

「もうアイツは仕掛け終わってる、だから早く事態を收拾しないと。」

コーキングガンを狙って撃ってみるが専用の武器ではないので照準があっていないので全然見当違いの方に飛んでいってしまう。

「今から補正、間に合うのか？」

その間に鋸を持った掃除屋は出発しようとしているチャーター便に向かって鋸を撃とうとしていた。

「盾、何か防ぐもの、ええい盾もないなんて、耐えて見せろ！」

士郎は鋸の弾道を計算し、最も硬いであろうコックピットで受け止めることにした。

「ナタリーさん、衝撃に備えて！」

鋸が機体に当たりものすごい衝撃がコックピット内を駆け巡る、衝撃に応じてエアバックなどが左右上下から飛び出してきて士郎とナタリーへの衝撃を和らげはしてくれたものの士郎とナタリーのヘルメットがぶつかり合った分の衝撃は何も吸収してくれず、お互いの痛みとして記憶された。

「士郎、なにやってるのよ。今の貫通してたら私達死んじゃってたわよ。」

今の衝撃の痛みで改めてナタリーは戦闘をしているという現実を実感した。

同じく士郎も戦闘をしているということ、しかも自分一人ではなくナタリーが同乗しているとい

うこの意味を理解した。

「ごめん、でもこいつ最新式のフローティングコックピットだからあれくらいでは貫通しないよ。」

ナタリーに対する説明というより、自分に言い聞かせている意味合いが強かった。

一機目で明らかに性能の違いを感じたはずなのに、なぜ敵は向かってくるんだ？

非合理的極まりない判断が底知れぬ恐怖が士郎の中に充満していた。

「でもいくらフローティングコックピットだからって、打ちどころ悪けりゃ死ぬんだよ。」

コーキングガンを連射し、ずれた照準を的確にメガネ型端末が補正しながら数発命中させ

二機目の動きを封じると、三機目というところでコーキングガンの弾が切れてしまった。

「もういいだろ、お前なんて殺しちゃえるんだから、逃げろよ。早く目の前から消えろ

よーっ！」

士郎の叫びと同時にオートマトンは左腕を上げ、構えた刹那一

敵の司令官からと思われるノイズ混じりの音声が傍受アプリケーションから響いた。

「もういい、シャトルを爆発させるから混乱に乗じて退却しろ。」

士郎とナタリーの頭の中は真っ白になってしまった。

シャトルに近付こうとした時、窓から外の戦闘を眺めている父の姿がはっきりと士郎の目に映しだされていた、同じくナタリーのヘルメットにも神に祈りを捧げて手を合わせているアガサの姿がハッキリと見えたのだ。

次の瞬間、シャトルはものすごい勢いで爆発をした。

「士郎、聞こえるか？この爆発に紛れて飛び出す。拾えるだけ部品を拾って開いているハッチから乗り込め。」

「テリー、テリー、父さんが！」

火はまたたく間に燃え上がり機体全体を一気に燃やし尽くした、あっという間の出来事で士郎は何もできなかった。

焼け焦げた世界の中に自分の父がいるという現実と、そして助けられなかったという後悔と、ここ数年反抗ばかりしてまともに向き合えなかったという後悔と、なによりショックで言葉を失い呆然としていた。

士郎のメガネのレンズには父親との数少ない思い出の写真や父が出ていた新聞の切り抜き記事、そしてさっきシャトルで見た本を読んでいる横顔が映し出されていた。

「ごめんよ士郎、この状況下で十分にお別れを言っている時間はないんだよ。まずは僕達が生き残らないと。」

「死んだのか？父さん・・母さん置いて先に死んだのか・・」

(アガサ、ごめんなさい。ごめんなさいって言いたいただけなのにもう伝えられないのね。)

ナタリーはただ士郎の手を強く握りしめながら、何度も何度もごめんなさいと呟いた。

「別れはもう終わったわ。士郎君、もう行きましょう。私達生き残らなきゃ。」

「パイロットの状況を把握、掃除屋回収急げ、さっきの交渉の録音できているか？爆発は犯人の

仕掛けた爆薬が爆発したことにするから編集し直せ。」

ドルゴスレン艇長はしばらく髭を撫でてから指示を撤回する。

「いやまて、掃除屋回収ゆっくりでいい。」

副官がドルゴスレンの顔を覗きこんだ。

モニターには意識を失ってコックピットから引きずり降ろされ運ばれるバドルフの姿が映っていた。

「もう十分やったろう、危険手当がつくことは確実だ。給料以上の仕事をしたって上は認めちゃくれないよ。給料の範囲で働こうじゃないか。そもそもあんな化け物相手に戦えなんてそれ自体が給料の範囲外だったの。」

「私がこの船の責任者になる、アメリカ合衆国陸軍のブルックス少尉だ。君たちの活躍はアメリカ合衆国を通じて母国にも伝わることだろう。我々はその新型を地球に送り届けるのが任務である。それにもうしばらく協力してほしい。」

士郎とナタリーは握手をした。

「大切な人を亡くしたのは君たちだけじゃないんだ。だから特別扱いはできない。何かあった場合にはまたアレで出撃してもらうことになる。今すぐ出撃できるように準備をして欲しい、今の機体が消耗したのならコンテナから新しい機体を出して使ってくれて構わない、できるな？」

「自分自身いつ殺されるかわからないこの状況で、あんた達を守れっていうんですか？こっちは未成年、そっちは軍人。どっちが守るべき立場なんだよ。」

テリーが士郎を制止した。

「お前も見ただろう？あの兵器の力を。アレさえあれば地上の戦況は大きく変わる。届けることに協力するのは連合側国民として当然の義務だよ。」

「そんなこと言われたってよくわからない。おれは母さんに会いに行きたいだけなのに。政治とかそんなのどうでもいいんだよ。」

テリーの手を振りきって士郎はブリッジを出ようとしている。

「待てよ士郎、どこ行くんだ？」

「倉庫に行くんだよ、生き残らなきゃ泣くことだってできやしない。あんた達を助けるためじゃないし国家がどうかという問題じゃない、おれ達が生き残るために準備するんだ。ナタリーさんも行こうよ。」

「私も？」

士郎はナタリーの手を握って強引に倉庫へと連れ出して行ってしまった。

ブルックス少尉は首を横に振りながらつぶやいた。

「だから苦手なんだよ、子供は。」

それを聞いてダニエルが大声で笑った。

「あんた達余裕ないのはわかるけど、あの子達いなきゃ今頃死んでたろ？感謝の一言くらい素直に伝えてやったらどうだい？それも大人の勤めってもんじゃないのか？」

「民間人が偉そうに。」

「とりあえずあそこから生きて出ることができたんですから、仲違いは止めてとりあえずあそこに降りることを考えましょうよ。」

テリーはいつでもどんな時でも建設的であった。

操縦席にある外部モニターの絵にはでかでかと地球の姿が映っていた。

「こんなに目の前にあるのに遠いな、地球。」

暗く狭い部屋、テーブルにはブランデーに氷が浮かんでいるグラス。そしてテレビ放送の明かりだけがその部屋を照らしていた。

「月時間本日の十四時半頃、地球と月の軌道上にあります宇宙ステーションフォチューンにて地球への定期便を狙ったハイジャック事件が発生をいたしました、連邦宇宙公社警備部が駆けつけたところ犯人は取り付けた爆弾を爆発させ定期便は大きく炎上、乗客乗員、ターミナル従業員の全員が死亡いたしました。現在はフォチューン内に犯人が潜伏していないかどうか捜査中であり、ターミナルの復旧は未定となっております。犯人の声を録音した物が届いております。」

『おっと気をつけろよ、この船には爆弾を仕掛けたからな。この船爆発しちゃうからね。』扉がノックされる。

「アイバーンさん、食べ物を持ってきました。」

扉の向こう側には武装した連邦宇宙公社警備部の面々が突入の瞬間を待っていた。

「アイバーンさん？開けますよ？」

重装備の警備部員が手信号で合図を送る。

「反抗するようであれば射殺も構わん。突入！」

部屋の真ん中でチョコレートを貪っている太った男が驚いた表情をしていた。

「ここはアメリカ合衆国の領事館内だよ？なんで君たちが来ちゃうのさ。ルール違反だろうに。」

相変わらず甲高い声だった。

「領事館に踏み込んだ謝罪？ご冗談でしょう。ではなぜその領事館にこちらの秘密兵器を持ち出させた犯人がいたのかを正式に抗議せざるを得ませんが。」

白くスラリと伸びた手足と腰まで伸びた黒髪が象徴的な女性が笑顔で通信をしていた。確かに顔全体としては笑顔なのだが目元は笑っておらず、不気味な怖さを感じさせていた。

「それに大統領閣下、もしあのチャトルが貴国領内に着陸するようであればさらに大々的な抗議をせざるを得なくなりますのでご了承くださいね。」

通信相手はついこの前就任したばかりのジェフリー・アンダーソン大統領だ。53歳と若く、国民の絶大なる支持を得て当選したのだが就任早々とんでもない大きな問題にぶち当たっていた。

「しかしミスマヤス、公社の大株主は我が国であるということもまた事実だということ認識していただきたい。」

アンダーソン大統領にしてみれば娘のような年齢に見える女性相手なのだが、その気迫に圧されてどうしても歯切れが悪くなってしまふのだ。

「三十年前の増資問題の時に応じてくださらなかった貴国は大株主の特権を失っておりましてよ。当時の八カ国あった株主の権利は均等化され、貴国はその中の一カ国ということ

ですわ。

さらに今ではそのうち四カ国がノイマン帝国に併合されているのですけれど、お忘れかしら？」

就任直後であまりその辺りの知識がないアンダーソン大統領にとって、これ以上この問題で話し合うことは不利と察した。

「わかった、その件は了承した。しかしケネディー宇宙センターは我が国の領土内にある施設。そこの封鎖は我が国の持っている株主の権利を不当に犯している。」

「勘違いをしないでください。ケネディー宇宙センターを封鎖しているのはアレを奪い取った犯人達が我が警備部の追求を逃れるためにケネディー宇宙センターから繋がっている宇宙ステーションフォチューンが壊されたのです。今ケネディー宇宙センターのマスドライバーからシャトルが打ち上げられても行き先がないので封鎖をしているのです。

それに封鎖されて困るのは生活物資が入って来ない百万の宇宙市民の方なのですけれど、貴国がお困りになることは何かございまして？」

「我が国や同盟国の核廃棄物を宇宙に廃棄しなければならない、それはそれで困るのだが。」

「今日明日、どうしても廃棄しなくてはならないほど蓄積しているわけでもございませぬ。数日もあればフォチューンは機能を回復いたしますが、それくらいは待てるものでしょう。大統領閣下は一体何を焦っていらっしゃるのです？」

アンダーソン大統領は降参とばかりに両手を広げて通信を切ろうとした、それを月の女王と呼ばれるマヤスは追撃した。

「大統領閣下。我が公社はあの強奪犯達を地球上のどこにも降ろさせるつもりはありませんので、他国ならばと根回しなどしないようにあしからず。」

「我々も現在均衡の取れている世界平和を乱すつもりはないことを覚えて置いて欲しい。」

「わかりました。それではごきげんよう、大統領閣下。」

地球との通信を切ると社長室へ警備部員に抱えられるようにしてアーバイン課長が連れて来られた。

「あなたはいつも困り者です。あなたが望む物はすべて与えました。作りたい物はすべて作らせました。そして私の体をいつでも自由にすることも許しましたのに。私との子供ではなくあのような醜悪な二足歩行ロボットに固執して、さらには地上に下ろそうとするなんて。」

「醜悪なんて。二足歩行ロボットは人類の夢だよ。」

尊敬するヨコヤマ博士やトミノ博士の提唱した二足歩行ロボットの活躍を実現することこそが人類の崇高なる使命だと思わないのか？」

マヤスは思わずアーバインの頬をつねる。

「この私との子供よりも二足歩行ロボットの方を望んだとうこと？」

全然触れてもくれないと思ったらあんなものこそと作り上げちゃって。

アレを地上に下ろす意味などわかりもしないくせに。

それより私がお願いしていた大規模宇宙コロニーは作ってくれたのかしら？」

アーバインは目の前にあるマヤスの目から視線を逸らした。

「基本設計はできているよ、でもあれだけの物を動かす動力がないんだ。それに飽きちゃったから他にいろいろ作っといたけど。それじゃだめ？」

「ダメ！」

「いろいろとノイマン帝国には必要な物作ったんだけど・・・。」

「ダメ！」

大きなアーバイン課長の体が萎縮してどんどん小さくなっていっているかのようだ。

「ヴォリン鉱石が使いたいなって。あれってレーザーを当てたらヴォリン粒子生み出すんですよ？そのエネルギーがあれば動力に使えるかなって思うんだけど・・・。」

「ヴォリン粒子？あの時の研究者は誰一人もう宇宙にはいないわよ？

地球に戻った研究者でも生き残っているのはキミコ・スズキ博士くらいしかいないはずだけれど。」

「使わせてくれればそれでいい。データは残っているんだからあとは好きにやらせてもらいたいんだけど。」

アーバインは興奮してついついマヤスと目を合わせてしまったが、やはり笑っていないその目に怯えてしまうのだ。

「いいわ、ヴォリン研究に使っていた宇宙ステーションロペンを使うといいわ。

データや素材は当時のままよ。でも気をつけてね、貴方の身に何かあったら私が悲しいから。そのことは忘れないで。」

マヤスの手がやさしくアーバインの顔を撫でるのだが、その冷たい手が肌に触れる度に生きた心地がしないのだ。

モンゴルの大草原、積荷満載のトラックが動こうとしないまま夕暮れが迫っていた。

「バドルフ、交換部品がないのなら仕方ない。しばらくここで待とう。」

「でもドルゴスレン先輩、なんとかかなりそうなんですけど。」

「こいつももう応急処置だけで何年も動いてくれていたんだ。そろそろ本格的に修理してやらなきゃいけなかったのに無茶させたおれの責任だよ。だからこいつを休ませて、だれかがここを通りかかるのを待とうじゃないか。」

バドルフが振り向けばそこにはもうテントが張ってあり、さらに火にはお湯とさらにどこでいつ捕まえたのかわからないうさぎが焼かれていた。

「インスタント食品ばかりだと飽きるだろ？」

髭面のドルゴスレン先輩はいつも優しく、そして頼りになる地元の先輩だ。

子供の頃から兄のように慕っていて、高校を卒業した今でも行商を手伝うということで稼がせてくれている。

「いや先輩、このうさぎどうやって捕まえたんですか？」

「ちょいとうさぎ狩りは得意なんだよ。」

モンゴルの大平原を行き来する場合、どうにもならないことが起こるといけないので大体の場合は一週間分の水と食料は積んで走っているものなのだ。

やがて日が沈むと空には月が煌々と輝いており、その周囲を煌めく星々の輝きで埋め尽くされるのだ。

「流れ星、ですかね？」

「あれはデブリだよ。かつての宇宙開発で必要なくなった衛星とかが落ちて消えるんだ。そういうのを回収するために宇宙公社というのがあったよ。」

「先輩そういえば大学行ってそんな勉強してたんですよね？すごいや、こんな田舎から宇宙を語るなんて。」

ドルゴスレンはうさぎをひっくり返すと調味料をふりかけていた。

「宇宙公社に入りたいと何度も面接を受けてはいるんだけど採用されないんだよ。あんまりそのことは言わないでくれ。」

「でもほら、流れ星にお願い事すれば叶うっていいますし。今のうちにお願いしといたらどうです？」

「だからあれはデブリだって。」

「気分の問題です。流れ星だと思ってお願い事をすれば叶いますって。一緒にお願い事をしましょうよ。」

バドルフのあまりのしつこさにドルゴスレンは仕方なく星空を見上げた。

「バドルフ、お前は何を願うんだ？」

「この状況から早く助かりますようにって願うつもりです。」

「即物的だな。」

星空を横切る光が見えた。それを見つめながらドルゴスレンは熱い宇宙への思いを祈り、そしてバドルフも一生懸命に願い事を願った。

「それにしてもこの国はもう少し通信とか道路にお金を使ってくれればいいんですけどね。こんなところで路頭に迷ってしまったら連絡のつけようもないなんて。」

「仕方ないよ、宇宙開発を先進国が独占してしまって我々には高い値段を要求するんだから。衛星の一つでも使わせてくれれば安くだれでも通信機器が使えるのにな。」  
地平線の方向から明らかに星と違う光が揺れながら向かってきているのが見えた。

「バドルフ、早速流れ星の効果が見えてきたな。」

「ええ、だから先輩もあきらめないでください。きっと宇宙に行けますよ。」  
バドルフはライトを片手に大きく手を振っていた。

目を開けるとそこは警備艇の医務室のようだった。  
忙しく動きまわる医師はまだバドルフが目覚めたことに気が付いていないらしい。  
見渡すとそこにはドルゴスレン艇長が心配そうに自分のことを見つめてくれていた。

「気が付いたか？」

「流れ星にお願い事しておきましたから。大丈夫です。」  
あの頃からしたらさらに濃くなった髭がドルゴスレンの顔中を覆い尽くしているので表情はわかり辛いのだが、きっと髭の奥は不思議そうな顔をしているに違いない。  
あの時流れ星に願ったのは助かりますようになどということではなかった、尊敬するドルゴスレン先輩を宇宙に連れて行ってあげてください、そう願ったのだ。  
その願いが叶っていることにバドルフはある意味満足をしているのだ。

「バドルフ、意識はしっかりしているか？」

「まるで夢の中のようなのですがしっかりと聞こえてますよ。若い頃の夢を見ていました。あの頃から比べたらお互い老けましたね。」  
ドルゴスレンの大きな手がバドルフの額を撫でていた。

「すまないな、あんな化物相手の仕事だと聞かされていればあんな危険な目に合わせたりしなかったのに。」

先ほど月から詳細データが送られてきたが、あれは掃除屋でなんとかできる類の物ではなかったよ。今映像データを調べさせているが、その分析が終わったら追撃を開始する予定だ。それまでゆっくり寝ている。」

「アイツは、あの化物はまた出てきますよね？仕返しをする機会がありますよね？」  
ドルゴスレンは大きく頷いた。

「ああ、ある。今度こそは我々が勝つ。昔からうさぎ狩りは得意なんだよ。」

「ええ、よく知ってます。」

ドルゴスレンはまたバドルフの額を撫でていた。

「お前にもしものことがあれば妹になんと言えればいいのか。」

「あいつもわかってくれます。若い頃からずっと艇長と一緒に走って飛んで戦って、今じゃ

念願の宇宙にやって来れましたし。もう思い残すことはありません。」

「おいおい。定年まで務め上げて年金を貰えるようになったらまたモンゴルの平原で暮らすって約束しただろう？」

「そうでした。うちの息子達にもうさぎ狩りを教えてもらわないといけませんでしたね。」  
ドルゴスレンの携帯端末が鳴った。

「すまないな、呼ばれているようだ。うさぎ狩りの時間かな？」

「行ってください。もう少しここで休んでおきます。昔の夢が見れてなんだからうれしい気分なんです。」

「そうか。しっかり休んでおけよ。」

バドルフはドルゴスレンが医務室から出ていくのを寝ながら見送った。

警備艇の司令室に戻ったドルゴスレンを待っていたのは報告の嵐だった。

「艇長、フォチューン内は掃除完了です。」

掃除屋に乗り込んで宇宙ステーションの隅々まで回ったカシモフは無線で無表情にそう告げていた。

「カシモフいつも汚い仕事ばかりさせてすまないな。」

「いえ、給料の範囲内でありますから。」

無表情すぎてそれが冗談なのか本気なのかがわかりにくいのがカシモフの唯一の難点であった。

続いて副官であるカラウンがタブレット端末を持ってきた。

「ステーション内にあるカメラから犯行組織とそこに逃げ込んだと思われる民間人が映っている映像を入手いたしました。」

映像にはオートマトンに乗り込む二名と、そしてシャトルに乗り込む二名の宇宙服姿が映っていた。

「画像解析をかけましたところ、人型に乗り込んだのは連邦宇宙公社専門学校生の鈴木士郎ともう一人は女性のお様子なのでガールフレンドでしょうか。

シャトルの方には同じく連邦宇宙公社専門学校のテリー・カーターとあともう一人はこのステーション内の従業員のお様子です。」

ドルゴスレンはじっと映像を眺めているだけであった。カラウンが続ける。

「フォチューン到着後からのドタバタを分析しますと、アメリカ軍にはシャトルを操縦できるパイロットは不在と見るのが妥当でしょう。先ほどカシモフが掃除した中にこのシャトルの機長が含まれておりましたので確実です。

月からの報告にありました合計五機の人型ではありますが、燃えたシャトルの残骸から組立前の二機分の人型部品が見つかりました。残り三機が持ちだされたと推測いたします。この学生が人型とシャトルそれぞれを動かしたと見れば敵の人型は最大で二機運用できることとなります。」

「だがシャトルがいつまでも手動操縦を必要とすれば一機しか運用できないわけだな？」

「ええ、そういうことです。」

画面を衛星図に変える。

「無計画に飛び出してしまったために軌道計算をするだけでも大きな手間だろう。ニュース映像を流したことで月の女王からの圧力で地上からの応援も見込めないとすれば人型を運用できる最大数は一機。

さらに大気圏突入のタイミングを見て仕掛ければうまくすれば人型を出すこともできないかもしれないな。」

ドルゴスレンはカラウンからタブレット端末を奪い取るといういろいろと計算式を打ち込んで計算をしていた。

「全乗組員に出港準備をさせろ。うさぎ狩りに出掛けるぞ！」

C-182便内は混乱をしていた。

「よし、姿勢制御はなんとか落ち着いたな。」

ダニエルはノーマルスールのヘルメットを外すと大きく深呼吸をする。

「ここからが本番だな。」

テリーもその傍らで一区切りついてヘルメットを外してダニエルと見つめ合う形になる。

視線で会話をしているようにダニエルとテリーはお互い何かを譲りあっているようだが、年長者のダニエルが根負けした形になりしづしづブルックス少尉に上申することに決まったようだった。

「少尉、実に申し上げにくいのですが。」

ブルックスも馬鹿ではない、二人の手が止まった時点で何かしらの問題が発生していることくらいは理解できてはいた。

「我々は命からがら逃げ出したにも関わらず、宇宙のデブリになってしまったとかか？」

「ええ、まあ。そんな感じです。姿勢は立て直せましたが今現在全ての通信を切っているため自分たちが今どこでどの速度で飛んでいるのかがさっぱりわからない状態です。このままだと二度と地球を拝めなくなる可能性がかなり高いのです。」

「かといって、通信網を開けば安定航行ができる代わりに敵にも我々の位置がわかってしまうということだな。」

「ええ。まあ。そんなとことです。」

ブリッジ内の空気は負傷兵の緊急手当中でただでさえ重い、さらに自分たちの居場所すらわからないとなると一縷の望みすらなくなってしまい、今やっている治療が無駄に思えてくるのだ。

「がんばれ、もうすぐ地球だからな。地球に戻ったらちゃんとした手当ができるからな。」

兵士達の声がむなしくブリッジに響きわたる。

「とりあえず通信の回復をしてヒューストンに連絡をし無事ケネディー宇宙センターに着陸したいのだが。宇宙に関しては我々は素人だ。君たちの意見が欲しい。」

「迷っている暇はありません。全通信を開放します。」

ダニエルの言葉にブルックスは力なく頷き、それを見たテリーは躊躇なく通信機器の起動を始めた。

「管制情報来ます。」

テリーの座っている場所のモニターに航路図が映し出され、そこに詳細な速度や位置のデータが表示されていた。

「マスター、読み通りです。あのマスドライバーは進路変更後だったようでそれほど大きくズレてません。修正できる範囲内です。」

「よし、通信回線もくるぞ。」

ブリッジのメインモニターに大きく映し出されたのはヒューストンではなく何かのニュース番組

のようだった。

「なんだこれは。」

メインモニターいっぱい宇宙ステーションフォチューンで先ほどまで起こっていた戦闘が映し出されていた。

『犯人はC-182便をハイジャックして依然逃亡中。繰り返します。宇宙ステーションフォチューンにて虐殺を行った犯人はC-182便をハイジャックして逃亡中です。』

「ちっ、売られたな。」

ダニエルが舌打ちをする。

「ハイジャックまでは身に覚えもなくはないがな。」

ブルックスは自嘲気味に笑う。

「他国も一切連絡付きません。」

テリーはそれでも諦めずに周波数を変えて通信許可を求める信号を送り続けるがどこからも返事は返ってこなかった。

「そりゃそうだろうな。アレを見る限りおれたちはハイジャック犯なのだから。公社から交渉があると思うか？」

ダニエルもテリーも無言で首を横に振った。今までの反乱は全て殲滅で幕を閉じているのが常識だからだ。

「よし、とりあえず我々に残された時間の計算をしてくれ。ヤツらが追ってくるとして、いつ追いつかれる？」

「追いつかれるもなにも、今は地球をぐるぐる回ってるだけですから。あと1時間15分後にはまたフォチューンに接近します。出てくるならそのタイミングかと。」

「どうしたテリー君、声が強ばっているぞ？イギリス人はこういう時にでもくだらない冗談の言える人種だと思っていたのだがな。」

ダニエルもテリーも鼻でくすっと笑ってしまった。

「ブルックス少尉、あなたはきっとイギリス出身の家柄に違いはないですね。」

格納庫でコンテナの中身を確認していた土郎のメガネ型端末にもブリッジと同じ映像が配信されてきていた。

シャトルが爆破される瞬間の映像から目を背けたくなる。

作業自体は土郎がこのメガネ型端末を使って格納庫内のアームに作業指示のスク립トを送り込んでいるので、あとは細かい座標データなどをメガネ型端末を通じてアームに送ってやればいだけである。

「ナタリーさんはここで待っていてくださいね。ちょっと行ってきます。」

土郎は作業がしやすいようにノーマルスールの上半身部分だけを脱いだ状態でコンテナに向かってワイヤーガンを撃ち込んだ。

ナタリーもその土郎の仕草がかっこよかったのか、上半身部分を脱いだまではよかったのだがワイヤーガンなど使ったこともなく、とりあえず壁を蹴って飛び出してみたのだが思ったようには

飛び出せずにあらぬ方向へと進んでしまった。

「士郎、助けて。」

士郎が振り向くとナタリーは動き回っているアームにぶつかりそうになっていた。

「あぶないってば、もう。」

士郎はアームの動きを止めて一度コンテナに着地するとワイヤーガンをセットしなおし、ナタリーを回収しに行くことにした。

「危ないよナタリーさん。無重力での遊泳はコツがいるんだけど、この格納庫は物が多すぎて練習には不向きですから。じっとしててください。」

オタオタ泳ぎまくるナタリーは士郎が近付いてくると溺れる者は藁をも掴むの例えのようにしっかりと士郎にしがみつく。

先ほどまでオートマトン内で感じていたよりもっと生々しく士郎はナタリーの柔らかい上半身と、そして良い香りを感じていた。

（これが女性の体なのか。）

いつの間にかしがみついていたのはナタリーの方でなく、士郎がナタリーにしがみついていたのだ。

「泣きたいなら胸貸してあげてもいいわよ。」

「泣きたいのかもよくわからないんだ。父さんは父さんなんだけど、月にはずっといたんだけど一緒に過ごした思い出なんてないから。本当にもう会えないって思っても悲しいっていう感情が湧いてこないんだ。」

「でも泣いてるじゃないの。強がらなくていいのよ。」

ナタリーは優しく士郎を抱きしめた。

「これは悲しいからじゃない。悔しいからだよ。きっと、もっと上手にみんなを救う方法があったはずなのに。いざとなると頭のなかが真っ白になって何もできなかった。自分が生き残るのに必死で父さんだけじゃなくてナタリーさんの大切な人も、あそこに乗っていた人達も誰一人救うことができなかったんだ。」

士郎はナタリーの豊満な胸に顔を埋めて泣いた。

「母さんってこんな感じなのかな。ずっと地球で闘病してるから会ったこともないんだ。」

「私ができるわけじゃない。私だって生まれてすぐに両親を亡くしているのよ。でも今まで見知らぬだれかがずっと私を支えてくれたからこうやって生きていられるの。これはその人達から借りた優しさのお返しみたいなものよ。」

格納庫の天井に当たる床に辿り着くと一旦士郎はナタリーから離れてワイヤーガンをセットしなおし、格納庫の入り口に向かって見事に撃ちこむとナタリーを抱きかかえて飛び出した。

「ねえ、士郎。聞いちゃいけないことかも知れないんだけど。お母さんもう長くないの？だってほら、普段あんまり会わないお父さんと地球に向かうってよっぽどなことなんでしょ？」

士郎は言葉にできないのか小さく頷く。ナタリーはそんな士郎の仕草を見て幼い頃の自分と重ね合わせてしまうのだ。

格納庫入り口に辿り着く頃には士郎の涙はすっかり消えていて働く男の顔に戻っていた。

「ナタリーさんはちょっとここで待っていてくださいね。あの新しいオートマトンの中で起動作業してきますから。」

アームが作業を再開し、コンテナから二機目となるオートマトンを取り出して立ち上がらせていた。

士郎はワイヤーガンをセットし、オートマトンに撃ちこんで飛び出した。

メガネ型端末からのリモート操作にてオートマトンのコックピットが開いてまるで士郎を出迎えてくれた。コックピット内に入り体をよじって座ろうと振り向いた時、士郎の視界にはまたオタオタと遊泳してこっちに向かってくるナタリーの姿が見えた。

「ナタリーさん、危ない！」

作業中のアームがナタリーの頭上スレスレを通過して士郎は心臓が飛び出すくらいにびっくりした。コックピットぎりぎりまで身を乗り出してナタリーの手を掴むと引き寄せ、コックピット内に無事収納が終わる。

あまりにも慌ただしい作業だったので、士郎はコックピットに座った状態で、ナタリーはその上に馬乗りになる形になっていた。

（どくんどくんどくん）

ナタリーの心臓の音、さっき胸に顔を埋めた時にも聞こえていた心臓の音、でもその時よりも鼓動の速度は早い。メガネ型端末にもナタリーの心拍数がモニターされ数値化されているので間違いなく早いのだ。

士郎は唾を飲み込む。手足が思ったように動かない。というか左手はナタリーの右手を掴んでいるのだが、あまった右手をどうしていいのかわからない。わからないのでどうしようとするが女性とそもそも接する機会も少ない月育ちなので頭の中にある男女の正しい姿など映画のラブシーンくらいしかないのだ。

（多分こういう時、右手で抱き寄せてキスとかするんだよな。）

妄想が周回を始める。ぐるぐるぐるぐると脳内を駆け巡り止まらなくなる。

さっきも感じた甘い香りと、そして華奢なのに柔らかい感触がさらにその妄想の加速度を上げさせるのだ。

士郎の右手は止められなくなった妄想通りにナタリーの後頭部を支えるとそのまま自分の顔に近付けるための力を……。

入っていないのだ、やっと右手はナタリーの後頭部に達したというだけで引き寄せてはいないのだ。ただあてがった手がそのまま後頭部にくっついているだけで自分で引き寄せたわけではないのだ。

士郎の脳内には甘酸っぱいツンとした香りが漂っていた。

（これが女性の唇？）

唇と唇が触れたりちょっと離れたりを繰り返している、その度にチュッという音がしていた。

「士郎にどうしても伝えたいことがあったの。もしお母さんが亡くなってしまっても一人ぼっちだなんて感じないで。寂しくなったら私の事を思い出して。今のキスのことを思い出して。そしていつか一人立ちできた日が来たらだれかとそれを分かち合っ欲しいの。」

「そ、それだけを伝えるだけにわざわざこんな危険なこと……。」

本当はもっと甘えたいという気持ちはあるのだが、どうしても照れくさくて正直に言えないのだ。

ナタリーのまっすぐな目も先ほどまで重ねていた唇も、やましい気持ちがあるからか直視できずに士郎は視線を逸らした。その逸らした先にある小さいモニターには先ほどまで戦っていたフォチューンでの映像データが映し出されていた。

さすがにこの体勢に恥ずかしくなってきた士郎は体を起こしてそのモニターに見入るフリをして誤魔化す。

ナタリーも何事かとそのモニターに目をやる。

「これさっきのニュース映像ではないぞ。」

テリーはブリッジにて必死に地球上に対して通信を試みていた。通信を開いてもらうのは不可能だと理解し、カーター家にだけ許された独特のリズムを刻む信号をイギリス向けに発信していた。

「父さんにこのことを伝えられれば、父さんなら動いてくれる。」

ダニエルはフォチューンまでの残り時間を計算しながら他の可能性を模索していた。

「大気圏内に入ってしまうえばコイツはただのグライダーと同じです。ですから大気圏突入前に目的地を決めておかないといけません。」

「海に着水とかはどうだろう？」

「積荷を諦めて大気圏内に入ったら緊急避難用の脱出ポットで脱出するという手がありますが。今のようにどこの国もダンマリを決め込んでいるようなら好意的な回収は恐らく期待するだけ無駄かと。」

ブルックスはしばらく考えこむ。

「確かにそうだ。この船の中で最も価値のあるのはあの積荷なのだからな。アレと一緒に降りることさえできれば取引もできようが。」

「取引するにも着陸する場所を開放してもらわないと。というジレンマですね。」

八方塞がりの中、さっきまでイチャイチャしていた士郎とナタリーがブリッジへと戻ってきた。

「とりあえず積み込んである三機全てが稼働可能な状態にしておきました。でもコーキングガンは二つしかなかったので戦闘に使えるのは二機だけですね。その他にめぼしい武器もないですし。」

とまで言いかけて、ブリッジの異様な光景にやっと気が付いた。

士郎は各モニターに表示されているデータや人々の会話の端々からあっという間に状況を把握した。

「あの、これ使えませんか？オートマトンの中に入ってた映像データなんです。どうもアレただの戦闘用ロボットじゃなくてかなりの情報収集能力もあるみたいで、フォチューン内のカメラというカメラで撮影した映像が残っていたんです。」

「どんな映像だ、映し出せるか？」

ブルックス少尉が食いついてきた。士郎はメガネ型端末をC-182便に同期させ、オートマトンとのリンクを貼ってモニターに表示させた。

「きっとここが使えると思うんです。」

監視カメラで撮影されていた掃除屋が民間シャトルに爆弾を仕掛けて爆破させるシーンが克明に記録されていた映像である。

「それとさっきニュース映像見てましたら死亡者のところにナタリーの名前も入っていたんですが、でも実際にはこうやって生きてます。これを地球上に流したら公社の流しているニュースが嘘だってことが証明できると思うんですけど。」

ダニエルも食いつく。

「それをどうやって地球上に流すというんだ？この船からの通信は全て拒絶されているのだが。」

」

「オートマトンのことはまだ公社も全体像を把握していないようでネットワーク上から遮断されていないみたいなんです。だからこういう映像も集められたんだと思うんですが。だからそれを逆手に取ってオートマトンから公社の衛星を使って堂々と地球上のネットワークに流しちゃいましょう。ついでに拡散スクリプトもセットしておけば消しても消してもネットワーク上に映像は残せます。」

テリーも食らいつく。

「その映像に僕も出よう。僕の姿を見れば母国もきっと動いてくれるはずだ。」

「そうね、カーター家の御曹司ですものね。」

ナタリーがくすくす笑ってその場を和ましてくれる。

それにつられて難しい顔をしていたブルックス少尉もダニエルもついついつられて笑ってしまう。

。

「御曹司だもんな。ついでに士郎君もその映像に出ればいい。偶然にもアメリカ人は軍人ばかりだが民間人の少年少女がイギリスと日本ならどちらかの国が動く可能性が広がる。」

（軍人ばかり？）

ブルックス少尉はダニエルの一言が気にはなったが今はそれが本題ではないので敢えて見逃すことにした。

「せっかく世界中に私の映像が流れるというのにお化粧道具を全部燃やされてしまっているわ。」

」

「ナタリーさんはそのままで十分にお綺麗ですから大丈夫です。」

「美しいのは当たり前でしょ？私はナタリー・ヤンソンよ。」

軽快なるテリーとナタリーのやり取りの中に入りたくても入れないのが士郎である。

しかし先ほどのナタリーの唇や胸の感覚を覚えているという優越感が無理にその二人の会話に割って入る必要を感じさせないのだ。

「ふふふ。」

# 赤い陽炎

赤いエアータンクはノイマン直轄の印、栄光のサフリ隊はいつでもどこでも大戦果を上げていた。そしてその隊長こそドルゴスレンであり、その部下として常にバドルフは付き従っていたのだ。

ノイマンは常に掴みどころの無い人物で、いつも笑っていて、そして今となってはどんな顔をしていたのかもわからないくらいに個性のない男であった。

「ノイマン、北京を陥落させた今こそ国を名乗るべきです。」

ドルゴスレンは猛烈にまくし立てていた。しかしノイマンはいいとも悪いとも言わず、ただただ笑っているのだ。

「衛星を手にするためには月の株主である中国の国家その物になってしまえばいいです。」

「それで足らねばロシアか？」  
「え、ええそういうことです。ロシアにはマストライバーだってあるから益々月への影響力は強まりますし、欧州各国への影響力も強まります。我が帝国は地上最大の帝国になりさらに月をも手中に収められる大帝國になりどこも手を出せなくなります。」  
「ドルゴスレン、テクチに何を吹きこまれた？」  
「そういいながらもノイマンはただただ笑っていた。」

「テクチが居なければ今頃エアータンクもなかったですし、ノイマンの考えも世界に発表できなかったでしょう？大国主導の世界を変えて自由にだれでも商売できるようにするために情報は握らないと。」  
「理想は理想、しかし現実を見れば北京市内で行うのは殺して奪って犯しただけのこと。この私が犯罪人と呼ばれぬためには確かに選択肢はそれしかないのだよ。権力者になり、合法的に国民を殺して奪って犯す存在になればいいのだよ。でもそれを否定したくて立ち上がったのだけれど、結局そうなるしかないのかね？私自身はただの行商人のままでも良かったのだけれどな。」

緊迫するやり取りをバドルフはただただ見守るしかなかった。

「ノイマン、貴方が皇帝とならねば貴方だけでなく我々全員が犯罪者となってしまいます。しかし貴方が皇帝となれば我々は全員建国の功労者となるでしょう。」  
「そしてロシアでまた大量の血が流れる、だろ？しかし君たちまで犯罪者にしてしまわなければならないのか。都合のいい理屈だ。だが時にこのような狂気こそが時代を動かすのかもしれないな。」  
ノイマンは笑いながら落ち着いた声で攻撃の開始を伝えた。

赤いエアータンクが北京へと砲撃を加え、あっという間に北京は占領されてしまう。

ノイマンは笑顔で占領した紫禁城から煙立ち込める北京市内を眺めていた。  
「中東が大国の都合により核廃棄物にまみれて死の砂漠になって久しい。モンゴルとてロシアや中国といった大国に挟まれ続けて苦しい立場だったのもわかる。私の主張がそういった不満分子の求心力になってしまったことを今更後悔しても始まらないのは分かっているよ。いや、心のどこかで思っていたんだ。こうやって主張すればだれかが担ぎあげてくれていずれば大国の長になれるのではないかとね。そういう己のどす黒い腹をテクチに見透かされているようでムカつくのだよ。」  
「天下をお取りください、ノイマン。」  
「うむ、だがドルゴスレンよ。このノイマンにその決意をさせたのはお前であるということをお忘れな。このノイマンが世界の暴君として君臨しようとも貴様だけは絶対に裏切るなよ。」  
「ドルゴスレン以下サフリ隊一同は赤い騎馬に賭けて皇帝陛下に忠義を誓います。」  
ドルゴスレン以下サフリ隊一同がその場に平伏し、ここにノイマン帝国が設立されたのであった。

ドルゴスレンの元にバドルフから通信が入っていた。

「バドルフ、もう大丈夫なのか？」

「ええ艇長、もうすっかり元気で掃除屋に乗り込んでますぜ。」  
ドルゴスレンはいつもよりバドルフのテンションが高いことに気が付いた。

「何かいいことでもあったか？負傷手当はまだ支給されていないはずだが。」

「寝てる間に夢を見たんです。懐かしい夢を。なんだか宇宙空間ってのは懐かしい夢を見させる効果があるんですかね？」  
「また夢か、今度はなんの夢だ？子供の頃モンゴル相撲でお前をコテンパンに負かした夢か？それとも妹と結婚した時の夢とかか？いずれにせよ昔の夢を見るのは不吉な兆候だぞ。」  
それでも画面の向こう側のバドルフはヘルメット越しでもわかるくらいにニヤニヤしていたのだ。  
「思えば二十五年前の北京から始まったんですね。この掃除屋も真っ赤に塗ってやればよかったですよ。」

「赤色は皇帝直属部隊の印だ。我々はまだ皇帝でなくなった人について月まできたのだから赤騎馬のことは忘れろ。」  
「そうは言っても艇長にはやっぱりあの赤いエアータンクが似合ってますぜ。」

通信の途中に他の通信が割り込んできた。副官のカラウンからだ。  
「艇長失礼します。部下の報告によりますとこんな動画が地上で流されているようなのです。状況が変わるかも知れないので早めに手を打つ方が賢明かと。」  
ドルゴスレンは添付ファイルを再生してみた。

『私のことをご存知ですか？ナタリー・ヤンソン、イギリスで歌手をしています。宇宙ステーションフォチューンの悲惨な状態からアメリカ合衆国陸軍所属のギルバート・ブルックス少尉に助けられこのC-182便に乗っています。同じくあのフォチューンに居た日本人の鈴木士郎、そしてイギリス人のテリー・カーターの三人は今現在もこうして生きています。あの報道は間違っています。私達の乗っていたシャトルを爆破したのは警備部の掃除屋です。この映像が証拠です。どうか地球や月の皆様、私達が生きてもう一度地球の地が踏めるようにお力を貸してください。そしてもう一度私に歌を歌わせてください。』  
ドルゴスレンはその容姿端麗な美少女ではなく、その脇でニヘラと笑っている少年に釘付けだった。

「ムーンチャイルドか、これはとんでもない事態になりそうだな、カラウン。」

「はい艇長、月に連絡をいたしますか？それとも月から介入がある前に片付けますか？」

ドルゴスレンは顎にしっかりと蓄えた髭を撫で回しながら思考を張り巡らせていた。

「おれ達はもう軍人ではない、給料の範囲で業務命令をこなすだけのサラリーマンだ。上司の機嫌を損ねて減給されてもかなわん。放っておけばそのうち新しい業務命令が届くさ。それを待っていればいい。」

「了解しました。」

カラウンとの通信を終えて再度モニターに映されるバドルフの顔に目をやる。

「無理をさせる必要はまったくないんだ。もうおれ達は軍人じゃないんだからな。」

「あの人は一体何を考えていたのかしら？人体型オートマトン、鈴木博士とその息子であるムーンチャイルド。これらを地上の降ろして何をさせるつもりだったのかしら？」

マヤスは移動中に速報を受けて携帯端末で動画を確認しながら頭を抱えていた。

「アーバイン課長のされることですから、単純に戦争ということではなさそうですね。」  
マヤスの秘書であるブラウンがその名前に似つかわしくない黒い短髪と切れ長の黒い目で熱くマヤスの顔を覗きこむがマヤスはそんなことに気付く余地もなく、慌てて携帯端末から警備艇へと連絡を入れる。

「ドルゴスレン？あの船にはムーンチャイルドが乗っているわ。無事保護しなさい。え？もし保護できない場合？」

日頃は冷徹で何事にも迷うことのないマヤスが珍しくオロオロしていた。

「その時は地上のどこかの国に着陸させるわ。とにかくムーンチャイルドの無事が絶対命題よ。わかったわね、もしムーンチャイルドにもしもの事があればあなた達も無事ではないことを理解しなさい。」

イケメンのブラウンは再度マヤスを覗きこむが、その表情にはまったくもっていつもの余裕は見られなかった。

「まるで母親ですね。」

マヤスがブラウンの切れ長な黒い目を睨み返してきた。

「軽口はいいから日本に連絡を入れなさい。C-182 便の受け入れを要請するのよ。」

「よろしいのですか？」

「男のあなたに母親の気持ちはわかって？」

「しかし実際にお腹を痛めたのはキミコ・スズキですけど。」

マヤスの足が止まった。

「でもこの月で彼を育てたのはこの私よ、士郎は私の子供なの。だから男ってわかってないのよ。」

あまりの気迫にブラウンはたじたじになってしまった。

マヤスは早足で廊下を歩き始める。

「だから男ってわかってないのよ。」

イギリスの英連邦大臣であるブラッド・カーターはテリーの父親でもあり、大忙しである。

「先ほどの信号に加えて今度は動画だと？情報は間違いないのだな？邦人救助に向けて全力を尽くせ！」

カーター大臣は急いで首相官邸へと移動し、ノックもそこそこに首相執務室へと飛び込んだ。

「バーンズ首相、この動画はご覧になりましたか？」

バーンズは恰幅のいい、というか丸々とした体をしている実に優しくそうな顔の男である。

「報告を聞きましたよ。」

「それでは対応は？」

カーター大臣はテーブルにまで詰め寄ってノラリクラリと交わそうとするこの丸っこい老人に詰め寄った。

「これ以上ノイマンを刺激して何の得があらましよう？そもそも秘密裏に進める話が公になり、何かあってもアメリカが責任を取るといので承諾した作戦でしたが。こうも公にされてしまうと国益を損じます。」

「何を言っている、ノイマンと拮抗するにはあの兵器が必要だということは説明してきただろう。それを操縦できるのは我が息子しかいないと散々説明してきただろう。今その両者が無事であるとわかったのに我らは何もしないで宇宙のデブリにされるのを指をくわえて見ているというのか？」

丸っこい体から二本の腕らしき突起物がブラッドを鎮めるように促すように上下に動いている。

「落ち着いたまえ。君の息子が危険なのは承知している。だがしかし君の息子のためにノイマンと対決するというのも国を預かる身としては天秤に掛けられない問題であるということも理解してほしいのだ。」

「我が身に元より私心などない。これは国益の話である。ノイマンに対抗しようという気力もないなど情けないと思わないか？」

「思っではいるが、それでも戦うという選択肢ほど愚かな事はない。戦わないということこそが最大の国益なのだよ。ブラッド、辛いと思うがここは英連邦のためにも耐えてくれ。」

ブラッド・カーターはテーブルを大きくもう一回叩いてから首相執務室を後にした。そしてその足で車に乗り込みバッキンガム宮殿へと向かう。

「女王陛下に面会を申し入れてくれ。」

「政局になりますか？」

美人秘書であるブリジッドはいつも一言余計なのが玉に瑕だ。

「ブリジッド君、長生きしたければ今の一言は致命的だ。この世はいつでも君の想像もつかない力が働いている。」

「失礼いたしました。」

「まあいい、今日は珍しく話したい気分なのだよ。」

「息子さんが助かるかもしれないと思えばだれでもできる限りのことはしたいと思えますもの。」

「ああそうだ、バカ丸出しの弱気な豚野郎は戦うこともしないで息子を諦めろと言いやがる。国民を守らない宰相など必要ないし引いては王室の権威も落ちてしまう。これでは国民は何のために税金を払っているのか疑問に思うことになるだろう。そして明らかに贅沢三昧をして丸々と太ったあの豚野郎に批判は集中するだろう。」

「そしてご子息に恋している女王陛下の心の隙間もご利用になられるのでしょうか？」

ブラッド・カーターは改めてブリジッド秘書を見つめなおす。

「君は本当にいつも一言余計なようだな。」

「申し訳ございません、おせっかいついでに既に女王陛下にはバーンズ首相の態度がどうである

かまでお伝えしております。次の首相候補ですが対ノイマン強硬派で知られるバークス議員、フランス難民の帰還政策を訴えているクラーク議員、同じくフランス難民に絶大な人気を誇るエドワード議員が適当かと思います。大臣との交友関係を鑑みますとクラーク議員が適当かと思いき既に面会を申し入れてあります。」

「気に入らん。」

「クラーク議員を次の首相に推すことですか？」

ブラッドはむせ返るように咳き込む。

「ああ、私の態度がですね。良くそうやって言われて参りまして過去何度も首にされておりますが。大臣の元で働くようになって生き生きと働かせていただけるので感謝しております。こういう私のことを大臣もお好きなのでしょう？」

「まさか日本へはまだ受け入れ要請はしていないよな？」

ブリジッド秘書は笑顔でブラッドを見つめ返す。

「さすがに大臣の職域に関することは勝手に動けませんので、原稿を確認していただきませんか、ねえ。」

ブラッドはさらに咳き込んだ。

「とりあえず私は女王陛下を説得してくる。日本への要請は任せた。」

バッキンガム宮殿に到着するとブラッドは車を逃げ出すように飛び降りた。

「長生きできないのは私の方かもしれんな。」

日本の木島総理は首相官邸にてアメリカのアンダーソン大統領と通信をしていた。

「アメリカ合衆国としてはあのC-182便の件は全面的に降りたということではよろしいかな？」

「ああ、こちらとしては全てにおいて手を引いた。権利は一切放棄する。」

「ではもし当方でこの作戦を継続するとなった場合、異論はありませんか？」

「好きにすればいい。だが我が国の備品や軍人については引き渡して欲しい。」

「その備品にオートマトンは含まれませんよね？」

アンダーソン大統領はしばらく無言であったが、それを認めた。

「ああ、オートマトンは含まない。軍人とその装備品を返してくれ。」

「わかりました、では後はこちらで作戦を継続させていただきます。」

「木島、余計な心配かもしれないがノイマンを刺激することになるぞ？」

「我が国はすでに5年前よりノイマン帝国には刺激されっぱなしですよ。おかげで今回のことも引くに引けないのが悲しい現実です。世論はノイマンと戦えと沸騰し抑えることもできません。」

木島は通信を終えると後藤秘書官よりタブレット端末を渡される。

「今回の件についての支持率です、圧倒的に国民の支持を得ております。さらにC-182便受け入れで鈴木士郎少年を無事に受け入れられたとすれば内閣支持率は今年の総選挙以来の80%回復も夢じゃありません。」

「国土交通大臣の収賄疑惑で落ち込んだ支持率がこんなことで意図も簡単に跳ね上がるとはな、政治とはわからないものだ。相模原で受け入れる、マスメディアにしっかりと鈴木少年の帰還を

朝のニュースで放送してもらえ。」

「総理も相模原に行かれますよね？」

「当然だ、少年と朝日の中で抱き合う絵を確実に抑えるように伝えておけよ。」

後藤秘書官が一礼をして執務室を出ていく。

「月の公社にもイギリスにも貸しを作ってアメリカには筋を通した。あとは5年前のやり直しを求める国民とどう折り合いをつけるかだが。これも時の運がなんとかしてくれないものだろうか。

」

# 奇襲

「C-182便、こちら相模原です。応答願います。」  
「こちらC-182便、日出ずる国からの通信感謝いたします。」  
「今から横田へ誘導します、データリンク開始お願ひできますか？」  
「周波数このまま、データリンク開始。」  
「データリンク確認できました。コントロールはこのままこちらで誘導します。日本に着陸したらちょうど夜明けになる計算ですね。」  
ブルックス少尉は小さくガッツポーズを取り、ダニエルにも笑顔が浮かんだその時である。

「こちら相模原、C-182便の後方に機影あり。警備艇に追われてますね。」

「こちらのレーダーではまだ捕捉できていない。」  
「この速度差であればまもなくレーダー範囲に入ります。着陸準備どうしますか？」  
ダニエルはブルックス少尉の顔を見上げた。ブルックスはマイクに向かって話しかける。

「こんな時に奇襲なんてな。だがこのまま着陸する、誘導頼む。」

「了解しました。C-182便、健闘を祈る。」  
ブルックス少尉は一度深呼吸をしてから全乗組員向けに回線を開く。

「警備艇接近中、総員着陸準備を急げ。オートマトン乗組員はそのままフローティングコックピット内で待機。」

その通信を聞いてテリーも士郎もフローティングコックピットのハッチを閉めた。

テリーは一人でベルトを締めて士郎はナタリーと一緒にベルトを閉める。  
「コーキングガン確認、シールド確認、母船とのワイヤー接続確認。これでいつでも出れるが、どう戦うというのか。」

コーキングガンでは敵の掃除屋の動きは止められても警備艇の動きまでは止められない。落ち着けテリー、きつといい方法があるはずだ。」  
「テリー、こっちの機体はいつでも準備OKだよ。」  
「了解。」  
格納庫内を見渡すと、さっきまでオートマトンのパーツが入っていた空のコンテナを発見した。

「士郎君、ちょっといいか？いい案が浮かんだのだが。」

警備艇のレーダーが遂にC-182便を捉えた。

「うさぎ発見、いかうさぎ狩りのコツは生きて捉えることだ。わかったな？」

警備艇は一気に盛り上がりを見せていた。

「それとお前ら。ここは大気圏付近だから気をつけて戦闘しろ。今回の仕事では大気圏突入手当はつかないからな。」

バドルフからの通信が入る。  
「人型が出てきた場合を想定して外に出ています。コーキングガンであの人型を固めてからさっきの恨みを晴らさせてもらってもいいですよね？」  
「ブツは回収もしくは破壊でいいが中身は生きて月の女王に返さなきゃならんからやりすぎるなよ。それと気を付けろ、最悪二機出てくるぞ。追い込まれたうさぎは何をしでかすかわからんからな。」  
「敵が二機出てきたって宇宙空間じゃコーキングガンの打ち合いですよ。こっちは三機居ますから撃ち負けなきゃいいだけです。」

それもそうなのだが、なんだか嫌な胸騒ぎがするのだ。

だが戦う前にそんなことを口にしたら士気が落ちるかもとドルゴスレンは言葉を飲み込んだ。  
「よし、人型をコーキングガンで固めたらそのまま船内に突入。いいか、くれぐれも無茶はするな。命あつてのサラリーマン生活だからな！」  
「了解！行くぞカシモフ、ゲオルギー。」  
掃除屋はそれぞれ警備艇とワイヤーで繋がれていることを確認して飛び出していった。

テリーは格納庫のハッチを開けた。  
目の前に広がる宇宙、といってもヘルメットのバイザーに映るVRモニターの映像ではあるのだが、しかしそれはリアルでとても恐ろしい光景でもある。  
「新型VRモニター、これはリアルすぎて逆効果だぞ。テリー・カーター出ます。」

搬入出用のアームを使って外に出るとすぐ後方に敵警備艇と掃除屋三機が猛烈な勢いでこちらに向かって飛んできていた。  
「テリー君、もう大気圏突入寸前だから時間に気をつけて戦ってくれよ。」

「忠告はありがたいんですが、それを許してもらえるかどうか。相手のあることですからね。」  
姿勢制御系はほぼ自動で大丈夫のようだ。見事に推進剤を使って思い通りの方向を向いてくれる。

「嫌なものだな。軍人の我々が民間人の少年たちに守られるという構図は。」  
ブルックス少尉はヘルメットを被りベルトで体を固定しながら苦笑いをするしかなかった。  
「仕方ないですよ、宇宙は地上とは勝手が違うんですから。その分地上に降りたら思う存分守ってもらいますからね、少尉殿。」  
ダニエルもヘルメットを被りベルトで体を固定していた。  
飛び出したテリーは必死に敵との間合いを測りながらシールドとコーキングガンの動きを入念にチェックしていた。  
「士郎、合図と共にやってくれよ。」  
「わかってる。テリーも無理はしないで。」  
とは言うものの士郎の手は震えていて、一生懸命その震えを止めようとすればするほど止まらないのだ。  
「士郎、怖い？」  
「怖いよ、また大切な人を守れないかもって思うと震えが止まらないんだ。」  
ナタリーは自分の手を士郎の手の上に重ねた。  
「大丈夫、士郎ならできるわ。」

残念ながらノーマルスーツの上からなのでナタリーの手の温もりまでは感じられなかったが、不思議なもので落ち着くのだ。

「そうだね、今度こそ守ってみせる。」  
士郎はメガネ型端末の一部にテリーのVRモニターの映像を映し出した。

「もう来る。ナタリーさん、しっかり捕まっていますよ。」

コーキング弾がC-182便に命中し船体が揺れるのを感じた。

「カシモフ、ゲオルギー、もっと間隔を取れ。包囲する感じで撃ちこむぞ。」  
三機が散開してテリーのオートマトン目掛けてコーキングガンで撃ち込み始めた。  
警備艇やシャトルには戦闘用の装備は搭載されていない。そもそも宇宙戦闘など起こり得ない状況なのでそんな余計な物は付いていないのだ。  
警備艇はそれでも外装に補強などは施されていて壊れにくく設計はされているがその他は一般のシャトルと大差ない。  
しかしコーキング剤を飛ばしているだけのコーキングガンではシャトルに対してダメージを与えることもできないのだ。あくまで敵兵器を固めて動けなくすることしかできない。だが宇宙戦闘ではそれで十分なのだ。  
「人型を動けなくしてシャトルに乗り込むぞ。」

高性能センサーのおかげで調整さえしっかりしていれば特にパイロットが狙いをつける必要もなく正確に敵を狙って射撃してくれる。パイロットはいつでもトリガーを引くかということを残弾を見ながら決断すればいいだけなのだ。  
それでも動く敵などに対処するためには予測射撃などを行わねばならず、手動で狙って撃つこともあるがそれは本当に稀なことである。  
バドルフもカシモフもゲオルギーも、エアータンク時代からずっと自動射撃しか経験がないのだ。それくらいにエアータンクが圧倒的兵器であったし、この掃除屋も宇宙では敵なしの兵器であることに変わりはない。

テリーは初陣とは思えぬ落ち着きようで敵の弾を冷静に避け、受け流していた。  
「狙いが甘いということは自動射撃か、動いていればそう当たることもないが推進剤がいつまで持つか。」  
「テリー君、こちらブルックス少尉だ。動いているだけではダメだ、適度に牽制射撃を入れて相手を動かしてやらないと。」  
「了解、とは言ってもこっちも初陣ですから。そう都合よく動けるかどうか。」  
「大丈夫だ、テリー君ならばできる。」  
「おだてられるなら美女の方がうれしいですね。」  
テリーの手のひらは汗でべっとりになっていた。  
「テリー、まだかい？」  
「ああ士郎、まだだ。もっと引きつけてからじゃないと。ああそうだ、もっと引きつけないとな。」  
自分に言い聞かせながら次々に飛んでくるコーキング弾を避け、受け流し、そして適度に牽制射撃を繰り返していた。  
一歩操作を間違えればコーキング弾に捕まり動けなくなったまま大気圏で燃尽くされる危機を感じながら、テリーは見事にオートマトンを動かしていった。

「バドルフさん、当たりませんね。」

カシモフもゲオルギーも、そしてバドルフもテリーの操縦技術に翻弄されていた。  
「カシモフ、あきらめずに撃ち続ける。」  
とほいうものの、コーキング弾の残弾を見るにさすがのバドルフも焦ってきていた。

「艇長、完全にあいつを包囲できる距離まで近付けてください。」

ドルゴスレンも司令室から眺めていて、テリーの操縦技術の素晴らしさに見とれているところだった。

「人型一機で我々を翻弄するか。あのパイロット、ムーンチャイルドか？」

ドルゴスレン宛に月から通信が入った。  
「なんですか？今戦闘中ですが。え？日本に着陸させることにした？わかりました。お前ら攻撃中止だ！」  
攻撃中止命令を出したと同時に副官のカラウンが大声で叫んだ。  
「総員回避体制を取れ！」

テリーは三機相手に精一杯であったが敵の異変を感じたのは士郎の方だった。  
「テリー、もう行くよ？」  
言われて始めてテリーは気が付いた。  
「ああそうだ。今だ士郎君！」  
格納庫のハッチを空けて士郎機が勢い良く船体蹴って宇宙空間へと飛び出した。  
士郎機はコンテナを抱えており、そのコンテナを勢い良く警備艇へと放り投げたのだ。  
「ほらほら、デブリだぞ。しっかり回収しろよ、掃除屋さんよ！」

「こんな大気圏突入間際に二機目だと?!」  
ドルゴスレンの脳内にあった二機目の可能性は完全に排除されていた、それだけに見事な奇襲が成立したのだ。  
「緊急回避！」  
操縦士がそう大きく叫びながら加速を止め右へ大きく舵を切った。  
乗組員は大きな衝撃を感じたのだが、これがデブリとの衝突によるものか、それとも回避運動によるものかは理解できずにいた。

ドルゴスレンは衝撃から意識を取り戻した、一瞬であったような数分であったような、不思議な感覚から意識を取り戻すとすぐに指令を出す。  
「被害状況確認！」  
「各部損傷なし、航行状態正常です。掃除屋各機それぞれに・・・、艇長バドルフ機がいません。」  
「なんだと？どこに行った。ワイヤーは。」  
「先ほどのデブリでワイヤーが切れた模様です。カシモフ、ゲオルギー機は無事ですが両名とも意識を失っております。」  
レーダーに目をやるとC-182便がどンドン遠のいていくのがわかる。

「くっ、うさぎを追いつみすぎたか。」

コンテナは見事に速度を上げて突っ込んでくる警備艇目掛けて飛んで行ったのだが、それに気を取られていて士郎は機体の姿勢制御を忘れてしまっていた。  
ワイヤーが伸びきったところでオートマトンは止まったのだが、その衝撃でコックピット内は大きく揺れた。左右上下はエアバッグが出てきて衝撃を防いでくれるのだが相変わらず士郎とナタリーの間にはそれがなく、お互い強烈にヘルメット同士がぶつかってそのまま意識を失った。

「バドルフ機発見しました。」  
「よし、カシモフ、ゲオルギー回収後バドルフ機を回収に向かう。」  
「バドルフ機、推進剤が漏れていて制御不能の模様です。呼びかけても応答がありません。このままでは大気圏に突入してしまいます。」  
「なんだと?!無線で呼びかけまくれ!なんとしてでもバドルフをたたき起こして止めさせるんだ。」  
ドルゴスレンはモニターに映し出されるくるくると高速回転をしているバドルフ機を見て、もう助からないかもしれないが、しかしこのまま

何もせずに諦めるわけにはどうしてもいかないのだ。

「しかし艇長、バドルフ機はあのままでは無理です。」

「仲間の命を簡単に諦めるんじゃない。呼びかけろ！」

ドルゴスレンはレーダに目をやる。かなり遠くに行ってしまったC-182便を見て頭を抱えた。

「なんとということだ、うさぎ狩りを教えてやるなどと驕り高ぶった結果がこれか。おれはダメな男だ。許せ妹よ、許せバドルフ。」

「勝ったんだな、僕達は。」

数時間にも思えた戦闘だが時間にすれば十分程度の出来事だったようだ。テリーはドリンクを飲んで喉を潤すとダニエルから通信が入った。

「まもなく大気圏突入する。格納庫に戻ってオートマトンを固定してくれ。それと太郎君が反応ないのだが、確認できるか？」

テリーは周囲を見渡すとシャトルに引きずられるように浮かんでいる太郎のオートマトンが見えた。

「太郎、聞こえるか？ 太郎、ナタリーさん。」

急いで格納庫へ戻るとハッチを締め、反対側のハッチから出ている太郎機につながっているワイヤーを巻きながら太郎機をシャトルへと引き寄せる。

「太郎起きて！ 太郎、太郎。」

「ナタリーさん、気が付きました？ 状況はどうです？」

「だめ、太郎が起きないの。死んじゃったわけじゃないわよね？」

ナタリーの泣きそうな声が無線でC-182便中を駆け巡り、状況の壮絶さを訴えていた。

「こんな時に言い難いのだがテリー君、まもなく大気圏突入だ。太郎機を諦めてハッチを締めてくれないか？」

「ブルックス少尉、そんなことでできませんよ！ もうすぐ回収が終わりますから待っててください。」

「このまま全員が死ぬわけにはいかんのだよ。時に辛い選択をするというのも指揮官の勤めでね。あと二分のうちに改善が見られないならこちらから強制的にワイヤーを切断する。」

「そんな。」

テリーはワイヤー巻取りの残量を確認するがとても二分で回収は終わりそうになかった。

「ナタリーさん、なんとか太郎を起こせないですか？」

ナタリーは意を決してヘルメットを脱ぎ去ると太郎のヘルメットも外した。そして大きく息を吸い込んだ。

「眠れる月の王子様、お姫様のキスで目覚めなさい！」

（私を感じなさい、太郎。）

太郎の舌を感じながら何度も何度も絡めて見る。すると太郎の舌が動いたのだ。それどころか激しく反応し返してきている。

慌ててナタリーは太郎の顔を引き離すと状況を説明しようとするがなんと説明していいのかわからずパニックになってしまった。

「太郎、今は感じてないで考えて！」

まだ頭のぼーっとしている太郎だがメガネ型端末に出ている高度や時間、そして明らかに真っ赤に燃えているシャトルと自分の機体を見て背筋が凍る思いがした。

ハッチの向こう側にはテリー機が見える。

「テリー、推進剤ぶちまけてそっちいくから受け止めて！ ナタリーさん、しっかり捕まえてよ！」

「当たり前じゃない、簡単には放さないわ！」

「こい、太郎！」

「行っけーっ！」

推進剤でハッチ脇まで飛ぶとそこにいたテリー機がしっかりと太郎機の手を受け止めてくれていた。

「よし、僕も捕まえたぞ。月の王子様。ふっつ。」

「なんだよそれ。」

「ナタリーさんに聞いてみたら？」

太郎はナタリーを見上げると、ナタリーの顔が真っ赤になっていた。

「何見てんのよ。いいから早く固定しちゃいなさい。」

# 赤い彗星

「艇長、カシモフ機、ゲオルギー機回収終わりました。バドルフ機を追いますか？」  
「当然だ、仲間を見捨てるなんてことは許されん！」  
もう既に遠くに飛んでいってしまったバドルフ機は応答もなく赤く燃え始めていた。

「しかし追いついたとしても回収は難しいかと。」

「我々が諦めたらバドルフは絶対に助からないぞ。お前たちにとって仲間とはその程度の存在か！」  
「艇長、失礼いたしました！」  
警備艇内の土気は一気に上がったが、副官のカラウンは別の計算をしていて、その計算結果を操縦士にこっそりとデータで送っていたのだ。

「副官、これは。」

「このコースで飛べ。このままバドルフを追って艇長が遭難しては亡き皇帝陛下に顔向けができません。それにきっと艇長思いのバドルフのことだ、わかってくれる。」  
警備艇はそのままバドルフを追う形で大気圏へと突入していく。

「バドルフ、バドルフよ。無駄死にはしないぞ、無駄死にはしないぞ。」

燃え尽きるバドルフの機体がモニターに映し出され、ドルゴスレンは直立不動で敬礼をしたまま泣いていた。  
若き日から本当の弟のように可愛がってきたバドルフは今燃え尽きようとしていた。  
「艇長、まもなく大気圏突入ですからヘルメットを被ってベルトを締めてください。」  
副官のカラウンはドルゴスレンを押さえ付けながらもバドルフの燃え尽きる機体を見つめていた。

「こうして艇長が自分を追いかけてくるのをわかっていたのか、バドルフ。まるでプレセツク宇宙基地に我々を導くかのような方向に飛んでいくなんて。奇跡としか言いようがない。」  
フロートイングコックピットがパンとはじけて、そしてそれが最後の赤い光となった。  
「バドルフよ、もしお前が赤い流れ星になったというならばきっと地上のだれかの願いを叶えていることだろう。」

このおれの願いが叶ったようにお前もだれかの願いを叶えてやってくれ。」  
ドルゴスレンの目からは涙が止まることはなかった。

格納庫へなんとか収まった士郎はまだ頭がぼーっとしていた。

「ナタリーさん、重い。」  
「ちょっと、女の子に重いつて失礼じゃないの。そもそも好きで士郎の上に乗ってるわけじゃないんだから。」  
「重いんだ、重い。そう、重力を感じているってこと。生きてるってことだよ。おれ、ナタリーさんを守れたんだね。」  
ナタリーは自分を後ろから抱きしめる少年の手に自分の手を重ねあわせた。  
「ありがとう士郎、おかげで地球に戻って来れたわ。」  
脱ぎ捨てていたヘルメットの落ちる音も聞こえた。  
「うれしい重さだよ。生きている重さだよ。」

シャトルは横田基地の滑走路目掛けてまっしぐらに飛んでいき、そして無事に着陸することができたのだ。  
操縦室ではブルックス少尉とダニエル・アーロンが抱き合っていた。  
「ダニエルありがとう、まさか生きて帰れるとは思ってませんでした。」  
「少尉こそ、よくこの難解な作戦で生き残りましたね。さあもうヘルメットもノーマルスーツも要りませんよ。脱ぎ捨ててこんな宇宙船から飛び出しちゃいましょう！」  
操縦室から外に出るとちょうど日の出の時間であった。  
「とても素晴らしい日の出だ。」  
滑走路の脇から自衛官が何人か出迎えにやってきてくれた。  
「ギルバート・ブルックス少尉ですね？」  
「ええそうです。」  
「任務ご苦労様でした。早速ですが本国からすぐに戻るようにとお迎えが来てますのであちらにお乗換えください。」  
振り向くとそこには小型の輸送機が停まっていた。  
「まったく、コーヒーを飲む時間すらくれないのか。本国は。部下が何人が怪我をしている、申し訳ないが手当はできるか？」  
「あの輸送機の中でお願いします。」  
ダニエルが重そうな体を引きずってやっと追いついてきた。  
「コーヒーなら今度美味しいの煎れますよ。楽しみに待っててくださいね。」  
「期待せずに待っているよ、それではお迎えがあるのでお先に。」  
そう言ってブルックス少尉は輸送機に姿を消した。  
ダニエルは空を見上げた。

そこには赤い一筋の光が長く尾をたなびかせていた。  
「赤い彗星か、不吉だな。」

「これが私の乗る機体？」  
士郎とナタリーがフロートイングコックピットから降りるとそこには女性の自衛官が立っていた。中年なのだが見た目はとても綺麗な人である。  
「君たちがこれを操縦したというの、ひょっとして君が鈴木士郎君かしら？」  
「あ、はい。そうですけど。」  
士郎は怪訝そうな顔で女性の顔を覗きこむ。  
「噂には聞いていたけれど、本当に少年じゃない。」  
士郎は女性自衛官の胸に書いてある名前を見る。  
「峯岸さん？こいつのパイロットですか？」  
「ええ、まだ内定だけどね。君に教わらなきゃいけないことも多くありそうね、鈴木士郎君。」  
峯岸三佐は手を差し出し、士郎はその手を握った。  
その脇でナタリーはノーマルスーツを脱ごうとするがなかなか脱げずにいた。  
「ちょっと士郎、これ脱げないわ。」  
「あ、待って。手伝うよ。」  
ノーマルスーツを脱がしながらあの甘い匂いと柔らかさを感じていたが、しかしさっきまでのように抱きつきたいと思っても手が動かない、そういう距離感を感じるようになっていた。  
ナタリーには人気歌手の発する風格が戻ってきていたのだ。  
士郎もノーマルスーツを脱ぐと胸にまだフォチュンでもらったナタリーのサインがくっきりと残っていて、まさにいまの状況がフォチュンで知り合ったあの頃にリセットされたことを象徴していた。  
「ナタリーさん、急に動いちゃだめだよ。おれ達トンデモなく揺さぶられてまともに動けないかもしれないんだから。」

「でもこれ暑いじゃない、士郎も早く脱いじゃいなさいよ。」  
テリーはコックピットから自力で降りれずに自衛官に引っ張り出されていた、そのままタンカーに載せられて医務室に運ばれていくようだ。  
「戦闘があったとは聞いていたけれど、パイロットはあんなに消耗するものなの？」  
「いろいろありましたから。重力下だともっと負荷がかかるんでしょうからコイツ乗るの大変そうですよ。」  
日本の七月はとても暑かった。そして士郎は改めてここに何をしに来たかを思い出した。

ドルゴスレンはウランバートル郊外にいた。  
利便性の高い大都市近辺にいるにも関わらずゲルに住まうことをやめられない人も多い。  
たくさん並ぶ中から一つのゲルを訪れる。  
中には老人や子供たちが十二人いた、そして中年女性がドルゴスレンに丁寧にお茶を出してくれていた。

たくさんいる子供たちの中でまだ小さい妹は重苦しい雰囲気とは関係なく遊びたそうにしており、それをたしなめるかのようにそのすぐ上の兄であろうか、その兄が抱きかかえておとなしくさせようとしていた。  
「バドルフはノイマンの男として立派に戦い、そして散って行きました。私が今ここに居られるのは彼のおかげであり、生き残った者の勤めとして彼の最後を皆様にお伝えにきました。」  
「兄さんが付いていながら、なんであの人を死なせてしまったの？あの人はいつでも兄さんを追いかけて危険なことばかりして、でも宇宙に行ったら危険なことはないって言っていたじゃない！」  
急に泣き出した母親に驚いたのか、子供達はオロオロとし始めていたが、長男であろう男の子がみんなの背中を叩いてまわり落ち着かせる。

「坊主、父さんみたいに強くなれよ。そしていつか必ずうさぎ狩りのコツをお前に教えてやるからな。」

ドルゴスレンは懐から書類を取り出すと泣き崩れる妹に手渡した。  
「これは労災申請書の控えだ。必要な手続きはして置いたから。来月からこの子供たちを養えるくらいの金額は入ってくる。あいつの残してくれた貴重な財産だ、有効に使ってくれ。」  
「こんなの要らないわ、あの人を返してよ、あの優しかったバドルフを私達に返してよ。」  
「すまん。」

泣き叫び妹を背にドルゴスレンは悲しみに包まれたゲルを後にする。  
「こんなことくらいしかしてやれることなんてないもんだな。」  
遠い地平線の彼方に太陽は沈み、いつしか月が登ってきていた。  
「懐かしい光景じゃないか、バドルフ。おれ達はあそこに住んでいたんだよな、夢じゃないんだよな。」  
ドルゴスレンは大きな声で月に向かって叫んだ。  
「バドルフ、おれは戻ってきたぞ。お前も早く戻ってこい！」

一五年前、日本海にて。

「こちら現場のゆうなみから司令部へ、漁船から銃撃を受けている。反撃許可求む。」

「本当に銃弾なのか、確認を求む。」

「何悠長なこと言ってるんだ、こちらは銃撃を受けているんだぞ。」

峯岸健二尉は思わず声を荒げた。

「これで撃たれていた弾が模擬弾などであったなら国際世論が納得をしない、実弾である証拠を  
押さえてから報告求む。」

「バカを言うな、こっちは撃たれてるんだぞ！」

「だからそれを確認してから報告をしてください。」

「お前ら陸上（おか）の人間の脳みそは一体どうなってやがるんだ。血が流れてからでは遅いんだぞ！」

峯岸健は通信用のヘッドセットを乱暴に投げつけると机の上に置いてあった携帯用のカメラを手に取りCICを飛び出した。

ノイマン帝国になってからというもの海上の警備が甘くなり竹島沖にて大陸からの不法操業が後  
を絶たなくなっていた。

何度も話し合いがもたれたがその都度決めたルールは守られず、しびれを切らした日本政府は漁  
船を拿捕を敢行。

その強硬措置に対しノイマン漁船団が竹島沖に大挙して集まり今回の騒動となっていた。

その取り締まりを理由にノイマン帝国海軍も竹島沖に終結してきたので日本側もいざという時の  
ため海上自衛隊の出動と相成ったわけだ。

官邸では大島総理がその横幅の広い風体を晒しながら月の公社経由の回線にてノイマン帝国テク  
チ総帥と直接折衝を行っていた。

「この大騒ぎは貴国の意図とは違うものと認識しておりますが。」

「ええ、こちらの意図しているものではありません。もし漁船団が暴発するようなことがあれば  
当方にて処理をさせていただく所存です。ですので貴国の海上自衛隊は手出し無用ということで  
お願いをしたい。」

「しかしながら、エアータンク出動となればこちらの艦船も無傷ではありませんまい？」

テクチは上に向かって指を指した。月を意味する合図だ。

ここぞとばかりにミスマヤスが口を挟む。

「エアータンクに送る信号に自衛隊及び海上保安庁の艦船の識別情報を送りました。これでエ  
アータンクの攻撃は日本の艦船にはおよびませ...。」

大島総理はその巨体には似つかわしくない機敏な動作で立ち上がった。

「どうした？」

同じくモスクワにあるノイマン帝国宰相府でも老将テクチが珍しく慌てていた。

「予備の回線で繋げ！アナログ回線でもなんでも構わん、日本と回線を大至急繋ぐのだ！」  
月のミスマヤスはただただ呆然と切れたモニターを眺めているだけであった。

「状況を報告しなさい。」

「はい、地上と月を結ぶ特定周波数帯にECMと思われます。」

「どうやればそんなことが広範囲できるというの？いや、原因はいいわ。今すぐ光信号通話に切り替えてモスクワと東京を繋ぎなさい。」

「やってます、しかし雲が厚くて会話できるレベルにまでは達しません。」

ミスマヤスは思わず机を叩いた。

「なんでもいいからモスクワと東京に繋がりなさい、世界の安全が脅かされているのよ！」

「峯岸二尉被弾、様態は不明。繰り返します、峯岸二尉漁船からの銃弾に被弾、峯岸二尉の様態は不明です。」

「司令部への通信は？」

堀の深い険しい表情で問いかけたのは第一艦隊司令佐々木一馬海将であった。

「衛星通信できません。」

「哨戒機とのデータリンクは？」

「生きてます。」

「ノイマン海軍はターゲットから外れているか。」

「はい、外れています。」

佐々木一馬は躊躇なく命令をくだした。

「ではここは現場の判断が許される事態だな。峯岸二尉の血を持って我々は反撃の狼煙を上げる。漁船に対する攻撃を許可する！」

海上自衛隊全艦に攻撃許可が出た瞬間に勝負は決していた。

空域を飛び交う哨戒機からデータを受けた海上自衛艦がそのデータリンク機能を使って敵艦の位置を小さい漁船に至るまで全て網羅しているのだ。

「全艦、SSM-5C全目標に向けて発射！」

司令部からの指示により護衛艦全艦から艦隊艦ミサイルが発射された。

「あたご、あきづき両艦は引き続き漁船に対し攻撃を継続。他護衛艦は回避行動を取れ！」

日頃から訓練された艦隊運動にて自衛隊は見事なまでに隊列を移動させる。しかし小回りの効く漁船がしつこく周囲をまわりついて繰り返し銃撃を加えているのだ。

「現場こんごうより司令部へ。発射したSSM-5C、全弾命中。残った敵漁船活動停止を確認。」

「よし、ノイマン帝国艦隊の状況を確認せよ。彼らが無駄に刺激していなければいいのだが。」

「ノイマン帝国海軍、空母大破、巡洋艦、駆逐艦、確認できる艦船全て破損しています。」

艦隊司令部がざわわっていた。

「どういうことだ？我々の対艦ミサイルは彼らの艦船には被害を与えていないのだろうか？」

「我々ではありません、エアータンク来ます！」

「なんだと?! 回避運動を取りつつ海域を離脱せよ。もう一度繰り返す、我が艦隊はエアータンクからの回避運動を取りつつ全速力で当海域から離脱せよ。詳細はそれぞれの艦長の命に従え！」

通信回線が正常に戻ったのは五分後のことであった。

大島総理は官邸にて自衛隊からの報告映像を確認していた。

現場の映像はその巨体に似合わず機敏に動きまわる海上自衛隊の護衛艦が機銃をぶっ放しながらそれぞれにまとわりつくように飛び回るエアータンクに次々に沈められていく映像であった。すでに漁船団は壊滅し、ノイマン帝国海軍も上海艦隊、そしてウラジオストク艦隊が全滅し、海上自衛隊と海上保安庁はその三割の艦船を失っていた。

「エアータンクの活動停止を確認。敵対行為中止を求める信号を受信しました。」

佐々木海将の顔にもう血の気はなかった。青ざめた表情で先ほどまで逃げまくった海域を眺めると、そこにはただ破壊された船と、そして動かずにホバーリングしているだけの八機のエアータンクが浮かんでいて、コックピットからパイロットが大きく手を降っているのが見える。

「司令部への通信は回復したか？」

「はい、繋がっております。」

「くそっ、全艦に生存者の救難を指示。被害報告をまとめろ。」

何度も何度も佐々木一馬海将の手元にある専用通信回線は呼び出し音を鳴らすのだが、佐々木本人はどう報告していいのかわからずにいた。

「まさか海にも狐がいたとは。我々はどうやら狐につままれたようだな。」

一現代、自衛隊病院にて。

特殊ガラスで仕切られた空間で寝かされるやせ衰えた母親の姿を見て士郎は呆然と立ち尽くしていた。

「もう意識は戻らないんですか？」

見守る白衣の大人達は誰一人明確な返事をしてくれない。しかし確実に母の体はヴォリン粒子に侵され、もう生命を維持することすら困難な状態に陥っているのだ。

「お父様が地上に戻れば有効な治療法があるとおっしゃっていたみたいなの。何か聞いていない？」

たまりかねた峯岸和美がやっと口を開いた。

「父さんが？」

士郎のメガネ型端末がシャトルの爆発の瞬間を再生させる、思わず目を背けたくなるのだがそういえば父が大事そうにアタッシュケースを持っていたのを思い出させてくれた。

「きっとあの爆発と共にその治療法かもしくは治療薬は吹き飛んでしまったかもしれません。」

「そんな。」

生命維持装置が耳障りな警告音を発し始めた、その感覚がだんだんと短くなり、士郎はいやでも母の死期が近いことを感じさせられる。

「士郎君、辛いでしょうけど見ておきなさい、これがあなたの母親の最後なのだから。」

「嫌だ、嫌だよ。」

「ダメよ士郎君、しっかりしなさい。看取ってあげられるのはもうあなただけなのよ。この世界には大切な人の死に目に会えない人はたくさんいるの。そういう意味ではあなたのお母様はとっても幸せなのよ。命掛けで自分の息子が会いに来てくれたんですもの。」

士郎は防護服のようなモノを着させられ、三重にも重なるガラスケースの中へと入りやせ衰えた母親の手を握った。

先程までは忙しく動きまわっていた医師団も今は静かになり、公子の死を待つのみとなっていた。

士郎はその場から逃げ出したかった、こんなのは母じゃない。

士郎が産まれた直後から研究へ復帰し研究途中の事故でヴォリン症にかかり、その後は士郎をマヤスに預けて宇宙から地球に戻って療養をしていたので母親の記憶と言えば画面の中だけなのだ、これが望んでいた母親との再会と言われればとても理想的であるとは言いがたい。

「父さん、なんで先に治療方法があることを教えてくれなかったのさ。」

月の情報管理は徹底されている、もしヴォリン症の治療方法が見つかったならすぐにデータベースに登録されるはず。士郎は研究者としてそれを見る権利が与えられていたのだ。しかしそんな情報は地上に降りた今この瞬間ですら月のデータベースには上がっていない、メガネ型端末は見つけられないという検索結果を表示するだけであった。

「何かあるはずだ、ここにいるのも何か意味があるはずだ。」

士郎の中でいくつもの仮説と父親の顔が浮かんで消える。

生命維持装置の警告音の間隔がどんどん狭くなっていき、そしてやがて間隔すらなくなり、意識の戻ることもないまま母親公子はあっけなく帰らぬ人となってしまった。

士郎の目から涙が溢れることはなかった。ただ母親を助けることができなかったという事実には呆然と立ち尽くすだけであった。

ガラスに包まれた部屋を出て、防護服を脱ぎ終えた士郎の元へ佐々木一馬総司令がやってきた。

「君が士郎君かね。こんな時で悪いのだけれど、君にはこの日本に留まる自由も、月に帰る権利もある。どちらにしても手続きは必要となるがその手続きの関係上月に帰りたいのであれば今すぐここを出発する必要がある。」

血相を変えた峯岸三佐が割って入り話を遮る。

「ちょっと総司令、いえ敢えてお父様と呼ばせていただきます。父を失い、母を失ったばかりの少年にそのような決断を今すぐここでさせるなんて人間とは思えません。」

「和美、私への私情は捨てて冷静に考えてくれないか。彼がここに留まる気があるのであれば猶予はいくらでもあるが、月に帰りたいのであれば一刻の猶予もなくここを発たねばならん。今の国際情勢では木島総理は彼を月からの亡命者として宣伝に使いたいであろうから手放すわけがない。彼の意思を尊重するには米軍の兵士を送り届ける輸送機が飛び立つ今しかないのだ。」

「アメリカはこの子を素直に月に返してくれるのですか？どうせこの子の行く先々で外交の道具に使われるくらいなら私が責任を持って預かります。」

峯岸和美は呆然と立ち尽くす士郎を抱きしめた。

「本当なら男の子が欲しいと、あの人と言っていたのです。ですからこの子は私の子として育てます。」

「さて和美、私情は捨てなさいと言っただろう。その子を戦場へと送りたくなければ少しくらい耳を貸しなさい。」

峯岸和美の平手が佐々木一馬の左頬を貫いた。

「この子は私が守ります。戦場にもやりません。あの時、主人を守れなかった悔しい思いを忘れるわけもない。だからこの子は私が生命を掛けて守ります。あの人を死なせたあなたの指図は受けません。」

士郎は自分より少しだけ背の低い峯岸和美の柔らかい感覚に包まれていた。ああ、この感覚だ。ナタリーからも感じたこの感覚。この人を泣かせてはいけないのだと思う。

「地球に、日本に残ります。未成年の決定でもこの国では尊重されますか？」

佐々木一馬は苦虫を噛み潰したような表情を一瞬見せた。

「君自信がそういうのであれば尊重されるだろう。だが覚えておいて欲しいのだが。君を取り巻く大人達は全てが全て君をかわいそうな未成年だと思ってはいないということだ。君のおかれた状況や才能を使ってあらゆることを仕掛けてくるだろう。」

「全てのものからこの子を守ると言いました。」

和美の睨みつけるような目を見て佐々木一馬は説得を諦めた。

「和美よ、忘れてはいないだろうな。我が家の家訓は有言実行。その子を守るということは容易ではないぞ。」

捨て台詞を言ったつもりはないのだが、その場から立ち去ることにした。

「総司令、よろしいのですか？」

「あの子は自分自身で決断をした。和美は私情に流されている部分が大きかったが、あの子がそれに付き合う義理もあるまい。きっと地上でやりたいことがあるのだろう。それを阻止することはできまい。一度決めたことは最後までやりぬく、男とはそういうものだ。」

## 赤い巨塔

---

ーモスクワ、総帥府にて。

かつてクレムリンと呼ばれていた場所は今現在はノイマン帝国総帥のテクチが執務を行う総帥府と呼ばれていた。

その独特な東西入り混じったデザインはそのままに、内部はかなり手を加えられており、最先端の警備システムが作動している。

ドルゴスレンはその巨体を揺さぶりながら総帥府内を自由に闊歩できる数少ない人間の一人である。

総帥府の最奥にある総帥執務室の扉は開いていて、執務机で忙しく書類を作成している老人こそがこの国の最高指導者テクチであった。

ドルゴスレンは開いている扉をコンコンとノックする、テクチは気付いているのかいないのか、書類作成に夢中になっているようだ。

「お久しぶりです、てっきりこのデータから消されたかと思っていましたが。」

「おお、赤龍か。おかしいな軍人を辞め天に登った赤龍のデータが消されずに残っているとは。後で情報管理責任者を処罰しなければならなくなった。」

それでもまだテクチは書類から目をそらさない、ドルゴスレンは勝手に部屋に入って応接のソファにどかっと座り込む。

「その情報管理責任者とはあなた自身ですが、どう処罰をなされますか？ウォッカを一瓶飲み干すまで寝れないという処罰ならお付き合いもいたしますが。」

「妻以外の女性を一晩で十人相手するという処罰の方が辛いのだがね。」

やっとテクチは書類から解放され、応接のソファに向かうとドルゴスレンと握手を交わした。

「友よ、宇宙からの帰還を、そしてわがままな姫様からの解放を祝おう。」

「お元気でなによりです。」

「わざわざこの地上までやってきたということは、わしをこの重責から解放しにきてくれたのかな？」

「譲る気もないくせに、そういう軽口を言っているといずれだれかが本気で奪いに参りますぞ？」

テクチはグラスにウォッカを注ぎドルゴスレンに渡すと自分のグラスにもウォッカを入れてグラス同士を合わせた。

チンという軽快な音の後、二人は一気にグラスを空にした。

「で、月に帰りたいのであればシャトルに乗ればいいだけだ。私に何を言おうがファーストクラスなど存在しない席は用意できないが。」

「日本に降りたアレには借りがある。義弟がアレに殺された。」

テクチの表情が一瞬強張った。

「日本にはいろいろ借りはあるが、返そうにも我々にはアチラ方面の艦隊がないのだよ。国とし

て事を荒立てるのはまずいのだが。」

「気にしないで欲しい、私はここに忘れ物を返してもらいにきただけだ。貴方にもお国にも迷惑はかけないつもりだ。」

「ああ、アレか。赤騎馬。アレは確かにお前さん個人がノイマン皇帝からいただいたものだ。好きに使えばいいだろう。」

テクチは二つのグラスにウォッカを注ぐ。

「アレは四台あるのだが、他の三台はどうするつもりかね？もしよければお前さんみたいに借りを借りまくった男が数人いるのだが。」

「五年前の彼らですか？」

「ああそうだ、彼らが悪いわけではないことはその後の調査で判明したが。それでも彼らはもう軍の主流には戻れない。なにせ味方の艦隊を殲滅してしまったのだからな。さらに日本艦船に投降しこちらの軍事機密事捕虜にされてしまったのだからな。庇うこともできないさ。」

「苦い思い出ですね。」

ドルゴスレンはまたウォッカを一気に飲み干した。

「赤龍よ、第三部隊を覚えているか？」

「あのいけ好かないコンピューター野郎の集団ですね。アイツら今は何してるんです？」

「シベリア自治領化運動をしておってな、それを撥ね付けたら五年前にやらかしおったわ。相対的にこちらの力が落ちれば日本の力を背景に自治を手に入れられると思ったようだが日本が乗ってこなかった。浅はかな男たちだったよ。裏切り者には死を、愚かな部下たちが彼らだけでなく拠点まで綺麗に焼き払ってしまったので事の真相やどうやったかということまでわからなくなってしまったがね。」

「残念そうですね、もし彼らが生きていたら自治くらいは認めて、その代わりに月からの支配を崩せたのにと思っているのでしょうか？」

テクチはウォッカを一気に飲み干し、ただドルゴスレンにニヤリと微笑み返した。

「だが月はもう対抗手段を用意してしまった。」

「ムーンチャイルド、彼は今日本に降り立ちました。」

「ああ、だが日本は彼の本当の価値など知らんのだろ？もったいない、地上の人類が唯一月に対抗するための希望の光りだというのに。」

「そして彼は月の希望でもありました。地上人の手に落ちたのであればその危険性を排除しなくてはなりません。それが我々掃除屋の仕事でもありますから。」

「姫様は悲しむじゃろうて。お前さんを許さんかも知れんな。それでもやるのか？」

「ええ、彼こそが義弟の仇ですから。」

ドルゴスレンはただ頷いて部屋を出ていった。